

戦後六十二年 はじめて明らかになった

ブラジル勝ち組テロ事件の真相

醍醐麻沙夫

目次

1	パズルの嵌め絵	2
2	テロの概要	9
3	渡真利という男	16
4	カーキ色の外套の謎	21
5	東谷氏の手記	31
6	『敵中横断三百里』	39
7	赤誠会の動き	51
8	軍師歓迎委員会	67
9	仲間割れ	75
10	再びカーキ色の外套について	83
11	再び『敵中横断三百里』	105
12	軍事探偵	117
	付記	123

1 パズルの嵌め絵

日本の無条件降伏によって第二次世界大戦が終結したとき、海外にいた日本人のあいだには祖国の敗戦をにわかには信じない人々がかなりいた。前線に置き去りにされた兵士たちや南洋諸島の捕虜収容所のなかでさえ「勝った、負けた」の対立があったという。

海外に居住していた日本人たちで圧倒的に数がおおかったのは移民である。とくにハワイ、ペルー、ブラジルなどの日本人移民は、終戦の報を聞いたとき、祖国の敗戦を認めなかった、あるいは半信半疑だった人は半数近く、あるいはそれ以上いたのではないかと思われる。

その理由の幾つかをあげると、まず第一に当時の日本人は神国不敗の信念を植えつけられていたのだから、その信念にしたがえば日本が負けるはずはないのである。

第二として、戦況の判断は日本の海外放送（大本営発表）に頼っていた。大本営発表では敵の補給線ができるだけ延ばし、本土付近で有利な決戦をおこなう作戦のはずだった。だから決戦なしで降伏するはずはない（海外放送は終戦後まもなく占領軍によって禁止されたので、新しいニュース源はなかった。さらに短波受信機をもっている人は少なかったので、ニュースそのものも人づて

に聞いたので、正確とはいえない。

第三の、心理的にもっとも大きな理由は、各国でナシヨナリズムが台頭し、しかもこれらの国は日本に宣戦布告して敵国だったので、移民たちは戦時中にいろいろと辛い目にあっていた。それで、戦争が終わったら祖国へ帰る、あるいは日本へ帰れなくても日本の勢力がおよぶ南洋諸島などへ再移住して平和な生活をするという夢にすがって生きていた。「自分たちは日本人である。戦争がおわったら日本へ帰るのだ」というのが、いわば戦中の唯一の生き甲斐だった。だから、どうしても祖国の敗戦を認めようとしなかった。

こうした人々も終戦から日がたつにしたがって祖国の敗戦を渋々ながら認めるようになったが、予想以上に多数の人は「日本が勝った」あるいは「対等の条件で講和をむすんだ。すくなくとも負けてはいない」という考えをすてなかった。

そしてブラジル、ハワイ、ペルーなど、どの国でも似たような結社が誕生した。これがいわゆる「勝ち組」と呼ばれる組織である。あるいは神国不敗の信念にしたがっているので「信念派」とも呼ばれる。

戦中戦後はおい祖国の危機に移民たちの愛国心が澎湃ともりあがった時期で、ブラジル、ハワイ、ペルーな

どに類似の国粹団体の数はおおかった。いくつか挙げると、皇道実践連盟、愛国日本人会、忠君愛国同志会、臣道会、楯華連盟、正愛国日本人会、中道青年会などである。

これらは戦時中からあったものもあるし、戦後になって勝ち組の組織としてできたものもある。

このように、各国とも似たような状況のなかで、ブラジルだけで（とくにサンパウロ州中央部だけで）勝ち組による負け組への襲撃事件が発生した。それも偶発的な小さなものではなくほぼ九カ月にわたって約百件の事件、二十三人が殺され三十人以上が怪我をしたという大がかりな出来事だった。

各国の勝ち組が似たような組織、似たような要綱で行動していたのに、なぜブラジルだけで、それもサンパウロ州中央部だけでテロが起きたのか？

私がこれから書きたいと思っていることは、その疑問への追求である。それはただ古いことをほじくりだすのではなく、個人と集団の関わりなど人間がいつも直面する問題を含んでいると思われるからである。

またこの事件は日系人だけでなく一般ブラジル人の興味もひき、今日までかなりの本が出版されているが、テロの原因については「軍国主義教育による集団の狂気」というとらえかたが一般的だ。たしかに、そう言われ

ばそうなのだが、私はその「狂気」を生み出したカラクリを追求したい。

終戦からすでに六十二年がたっている。

勝ち組Ⅱテロ集団というステロタイプの見方にたいして、勝ち組だった多くの人たちが、今日まで抗議や弁明の声をあげている。

しかし、さほどの説得力はなかった。抗議や弁明は勝ち組の精神論にとどまり、具体的な事実の究明がされていなかったからだ。

ブラジルの勝ち組については日本でもかなり多くの本や雑誌記事が発表されたし、ブラジルでは日本語やポルトガル語でいくつかの本や記事がでていいる。ポルトガル語の本のなかにはベストセラーにちかい売れ行きだったものもあるし、今日でも読み継がれている。

それらの、どの本も勝ち組の行動やテロの記述については、大筋では差異はない。しかし私の読んだかぎりでは、テロそのものの起因について、くわしく追求した本あるいは記事はない。一般的に言えば「起こるべくして起こった既成事実」として扱っている。

もちろん、「なぜ起こったか」という原因について、たいていの本が一応はふれている。

だが従来の説明は決して私を満足させるものではな

かった。たとえばサンパウロ州中央部には日本の軍国主義が先鋭になってからの移民がおおかった為だとか、若い連中の暴走を抑えられなかったとか・・・。軍国主義による集団の狂気とか・・・。

あるいは旧勝ち組のおおくの人の主張は「軍国主義に染まった若者たちが次々にテロを起こしたのだ。軍国主義こそがテロの最大原因だ」という。

事件の背景として、それは正しいと思う。しかし、それだけの原因なら、ほかの地方、ほかの国でも起こりうるのではないか？

それなのに、なぜサンパウロ州中央部だけで？ しかも、あれだけ大規模な騒乱が？

なにか説明されなかったものが存在している・・・。
以前から、隠された核心があると私は漠然と感じていた。しかし、ハッキリ分からなかった。従来の説明では満足できないなにかを、疑問を、ずっと抱えていた。

ずっとこの問題を追っていた訳ではないが、ブラジル在住の作家として、いつもこの疑問は私の関心のうちにあった。・・・そして古い資料にくわえて、時とともにいくつか新たな資料が世にでた。それらに目を通しているうちに気づいた。

いままでの本や記事が事件の核心に触れられなかったのも無理はないのだ、と。鍵になる核心は今日まで秘め

られていたのだ。

新しい資料がでたので「なにかが秘められている」ことに私はハッキリと気づいた。

そして、ある予測をいだいて戦前の本をさがしはじめ、昭和六年に日本で発行された本をようやく捜し当て、いま読みおわったばかりである。

いくらかは予期していたのだが、予期した以上のものがこの本のなかにあった。

この本がブラジルのテロ事件の深奥を解く鍵だった。

この本によって、これまで不安定だった多くの資料の断片が、どういう意味をもつか、どこに嵌め込むべきか居場所がキツチリと決まったと思う。いわばパズルの嵌め絵が完成されたのである。

「事實は小説より奇なり」というが、完成した嵌め絵をながめると、この事件も個人の意思、運命の変転などが複雑に絡み合っている。私の知りえたこと・・組み立てたパズルの嵌め絵の内容をこれから書いてみたい。

いろいろなことが今日までバラバラな断片としてしか知られなかった。私がえた鍵を使ってそのバラバラの断片を整理し、もつれた紐をほぐして、歴史を操った裏の世界を全体像として復元しようと試みるのが、本書の目的である。

まずテロ事件のあらましを述べることにする。

2 テロの概要

昭和二十年八月十五日に太平洋戦争が終わったという事実はブラジルの新聞ラジオなどでも大々的に報道されたし、日本の海外向け短波でも玉音放送があった。すべての移民たちも「戦争が終わった」ということだけは認識した。

それから一カ月半ほどたった十月三日にスイスに本部がある赤十字社からブラジル支部を通じて元アルゼンチン公使、元海外興業ブラジル支店長の宮腰千葉太あてに、英文の詔勅と東郷外相の海外同胞へのメッセージが届けられた（スイス、アルゼンチン、リオ、サンパウロと郵送された文書なので時間がかかった）。

宮腰はすぐに日系社会の有力者たちを集め、これを邦訳し日系社会にひろく伝達することを決めた。伝達書には七人の有力者たちが署名した。

そしてサンパウロ市の産業組合などで「時局認識講演会」などを開く一方、地方へもこれを配付し、あわせて講演会を開催することにした。これがいわゆる「認識運動」のはじまりである。

ところが驚くべきことに、地方には（それどころかサンパウロ市にも）臣道連盟という勝ち組の巨大組織がで
きあがっていて、認識運動が入り込む余地がないのだつ
た。地方で講演会をひらくと激昂した聴衆によって、伝
達書の説明や時局講演は遮られ、日本刀をもった男が壇
上をうろついたりホテルへ引き上げるあいだにも罵声を
あびせられたり、講師たちは身の危険を感じて、逃げる
ようにその土地を立ち去るしかなかった。

かといって、認識運動を中断することもできない。悪
意のある噂が飛び交い、両者のあいだには徐々に不穏な
雰囲気醸されていく。

そうやって、ほぼ四ヶ月がたった。

昭和二十一年三月七日夜、日本人移民が拓いたバストス
というサンパウロ州奥地の町の農業組合理事溝部幾太が
殺された。

田舎町の夜はくらい。十一時すぎに來客を送りだした
溝部は、裏庭をよこぎって母屋とはべつにある便所には
いった。用をすませ扉を閉めていると横の洗濯場の蔭か
ら黒い影が湧いた。

「天誅！」

かすれた叫びとともにピストルが発射された。

弟の義男が室内からとびだして犯人を追ったが、黒い

影はたやすく鉄柵をとびこえ闇にまぎれてしまった。やがて馬のひずめの音がおこり、遠ざかった。

溝部は海外放送で天皇の詔勅を聞いた一人だった。日本が負けたことを知ったが、慎重に「戦争が終わった。これからどうなるか分からないが各自の自重をもとむ」という内容の知らせを組合員に配付した。しかし敗戦派だということは知られるようになった。勝ち負けの対立から殺害されたと推定されたが、犯人はバストス在住者でないことが分かっただけで、警察は犯人の逮捕までにはいたらなかった。この事件は日系社会に大きなショックをあたえたが、この時点ではあくまで一人の過激派がおこした突発事件にすぎなかった（注・のちに山本悟が犯人だと名乗りでた）。

ともあれ、この頃になると各地の認識派に「天誅！」というようなビラが送りつけられ、あるいは門にペンキで大書され、日系社会は不安のなかに動揺していた。

その頃、バストスの事件とは無関係に、暗殺者として組織された青年たちが続々とサンパウロ市へ送りこまれていた。

彼らは出身地（ブラジルの在住地と日本の本籍）と姓名・年齢を墨書した日の丸を腹に巻き、カーキ色の外套を着用し、スミス&ウエッソン、コルト、ブローニング

など性能のよいピストルを帯行していた。彼らは挺身隊と名付けられていた。隊長は新屋敷直（しんやしきすなお）。彼らはA級B級C級にランクづけられた二三名の暗殺リストを持っていた。リストにのせられた者たちは認識派（負け組）で、リオ市とサンパウロ市に居住して日系社会全体に影響力をもつ大物ばかりだった。

三月三十日の深夜・・・。

街路樹が鬱蒼としげる宮腰邸のまえの舗道をカーキ色の外套を着込んだ十一人の隊員が徘徊していた。屋敷の主の宮腰千葉太は元アルゼンチン代理公使、元海外興業株式会社ブラジル支部長であり、スイス赤十字経由で海外邦人たちにおくられた英文の終戦の御詔勅を翻訳配布した認識派グループの中心人物である。

屋敷は舗道に面して鉄柵の門があり、周囲を芝生や植え込みで囲われた石造二階建てで、堅固だが十一人もの武装した隊員に狙われた宮腰の命は風前の灯だった。

しかし、道の反対側はブラジルの富豪のマタラゾ家だった。高い石塀がつづき、角にイタリア大理石の門があり数人のガードマンが詰めている（宮腰邸はパンプロナ通りにあった。道路をはさんだ前のマタラゾ家はパウリスタ大通りに面している）。

高原のサンパウロは秋のはじめだった。高原といって

も南回帰線がとおっている緯度だからシャツ姿でも歩ける時期である。カーキ色の外套を着込んでうろつく日本人の若者の一団にきづいて、ガードマンたちが不審気にこちらを注視していた。状況不利と判断した新屋敷隊長は全員に退去を指示し、その晩はアジトにもどり、暗殺リストの第二目標を襲撃することにした。

翌 三一日。

新屋敷は隊を二つにわけた。第一隊は持参の日の丸に「特行隊」と墨書し、元文教普及会事務局長、野村忠三郎を、第二隊は「決死隊」として元アルゼンチン公使、古谷重綱をを狙う。総隊長の新屋敷は残った。

五名ずつの隊員が目的地についたとき、四月一日の空が白みかけていた。

古谷家のほうがアジトに近かった。そのことが古谷の命を救ったといえるかもしれない。渡辺辰雄を隊長とする第二隊がついたとき、起床した古谷が寝室で黙禱する姿が窓越しにみえた。まだ暗い庭にひそんでその姿をみた彼らはすぐ攻撃を開始した。

驚いた古谷はとっさに身を伏せた。ピストルが乱射されたが家具が邪魔になって命中しなかった。すぐ客間に逃げこんだ古谷を追って、窓からつぎつぎと弾が撃ちこまれ、侵入しようと焦った隊員たちは狂気のようにドア

に体当たりをくりかえし、ピストルを撃ち込んだ。

住宅地のど真ん中での出来事だったし、バストスの溝部事件いらい不穏な空気がたかまっていたので、古屋宅には警察が警備の警官を派遣していた。やがて駆けつけた警官たちによって二人が捕まり、三人は逃亡した。

一方、ジャバクアラ区の野村宅にむかった坂口政吉を隊長とする第一隊は、第二隊の襲撃時刻より一時間ちかく遅くついた。襲撃がはじまったのは午前六時三十分ころである。

起きた野村の妻が裏のドアをあけた瞬間、五人が雪崩込んだ。妻の悲鳴におどろいた野村はパジャマ姿のまま寝室からとびだし、廊下で隊員と鉢合わせした。いきなり撃たれて昏倒した野村を客間にひきずりこみ、とどめの数発を撃ちこんでから、外套二着と靴片方をのこして五名は逃走した。

（野村は忠さんとよばれて親しまれていたが、指導的な立場ではなかったので警備はなかった。日本語教育が禁止されたので生計を切り詰めるために郊外の家につ越していた）

この事件は日系人だけでなくブラジル人社会にも大センセーションを巻き起こした。シンドウレンメイの名が

連日新聞の大見出しになって躍った。新聞記者たちにとっても格好の新聞種だったろう。ドップス（DOPS サンパウロ政治警察）の指揮のもと各地の警察は事件に関係ありそうな日本人を次々に連行して取り調べた。四月十七日にマリリヤ市で三つの殺人が同時刻に発生。五月六日、バストス町で郵便爆弾が七軒の認識派の家に配達されたが、いずれも不審をいだかれて不発。

そして六月二日・・・。

四人の特攻隊員が脇山甚作元陸軍大佐をサンパウロの住居にたずねて、会見したあと射殺した。

脇山は吉川とならぶ元軍人の大物で、はじめは祖国の敗戦を認めなかったのだが、宮腰に天皇の御詔勅をみせられ号泣し、在留邦人に敗戦をつげる配布文書に署名した。彼にとって天皇の言葉は絶対だったのである。

四人の特攻隊員を応接間に招じた脇山は、若者たちを説得しようとした。しかし彼らは短刀をテーブルにおいて変節者脇山の自決をせまった。それを拒否してピストルで撃たれたのである。

検死写真をみると、四人が同時に撃つたらしく胸に三発、腕の付け根に一発、いずれも真正面から命中している。四人にテーブル越しにピストルを向けられたときも、脇山は毫も体をうごかさずに対峙していたにちがいない。

「軍人らしい最後」という言葉がもしあるとすれば、脇山の最後はまさにそうだったろう。

彼らはそのまま自首した。四人とも四月一日の襲撃に加わった隊員である。山下広美（二二）北村新平（二二六）日高德一（二二〇）吉田和訓（三〇）。これで第一次特攻隊は六名が逮捕された。

勝ち組によるテロはサンパウロ州奥地に連鎖反応をおこした。連日のように事件がつづいた。狙われたのは地方都市の商店主や医者などがおおい。店や診療所において狙いやすいからである。

テロは八月十五日の終戦一周年をピークとして、その後はおとろえ、発生九カ月後に消滅した。（翌年の一月に単発の事件が発生）

死者二十三人負傷三十数名。オスワルド・クルース町事件のようにほぼ町全域にわたってブラジル人と勝ち組のあいだで四日間にわたって騒乱状態となった大事件もあった。

（日の丸の「特行隊」の文字がブラジルの新聞にはTOKKOTAIと書かれたので、邦人は、勝ち組のテロを「特攻隊」と呼ぶようになった）

3 渡真利という男

四月一日の事件後にサンパウロ警察だけでも約六百人の日本人を連行して取り調べたといわれる。「日本が勝つたか負けたか」と聞くだけの簡単な取り調べだけですぐに釈放された者もおおいが、かなりの人数、とくに臣道連盟の幹部クラスはそのまま起訴された。

取り調べや裁判の記録に見いだしたかぎりでは、誰が特攻隊のオルガナイザーであるかは、それほどはつきりしない。何百人も通訳つきの集団の取り調べであるし、新しい事件がつぎつぎに発生し、検事も裁判官も祖国の敗戦という異常事態によって発生した集団の狂気というとらえ方をしていたからでもある（事実、日系社会はそういう様相を呈していた）。

裁判の結果、犯人たちとアジトや資金提供者たち、それから犯行を示唆したとして理事長の吉川（きつかわ）順治以下臣道連盟の主要関係者たち、計八十名はそれぞれ刑期を宣告され、あるいは「好ましからざる人物」として国外追放処分の名目で、昭和二一年八月一二日、サンパウロ州とリオ州境の沖にうかぶアンシエッタ島の監獄に収監された。

（ただし、国外追放の処置と、アンシエッタ島に収容さ

れたことは、法的には直接の関係はない)

ここで渡真利(とまり)成一という男が登場する。

彼は臣道連盟(以下臣連と略記)の情報部理事だった。臣連は大政翼賛会の機構を真似ている。理事長のしたに専務理事がいて、以下総務部、教育部、外交部、情報部がある。

情報部の業務は言論、通信、慰安となっていて、表向きのおなも仕事は広報だが、人々の思想を統一したり監視したりもする。

臣連の組織から推測しても、彼が特攻隊(挺身隊)を立案した中心人物だろうとは、はやくから言われていた。

すでに書かれた本でも「渡真利が首謀者だ」と言い切っている著者もいる。しかし、そう書いてあるだけで具体的な記述あるいは追求はされていない。逆に「臣連の幹部たちはテロとは無関係だ」と主張する本もある。その場合もとくに渡真利についての考察はない。ポルトガル語で書かれたものは警察の調書をもとにしている。で、渡真利は他の臣連の幹部と同列にあつかわれている。「移民八〇年史」では渡真利を首謀者と断定している。しかしさほど具体的な説明はない。「八〇年史」以降の新材料によって、私はこれを書いている)

サンパウロ政治警察（DOPS）の調書によると、実行犯のうち逮捕された者たちの供述は以下のようなようだ。マリリア支部などサンパウロ州中央部の臣連の力のとくに強い地方で志願者が募集され、応募すると会員だったものは会員籍を除外され多額の支度金を受け取って、拳銃などの装備をととのえ、サンパウロ市の小笠原洗濯店あるいは映画弁士だった沢井天城の農園などに集結して訓練をうけたという。

取り調べにたいして小笠原亀五郎は（調書の供述によると）「自分が首謀者だ」と言っているが、警察はかならずしも鵜呑みにしなかったようだ。彼ではオルガナイザーとして小物すぎる。

沢井天城は臣連の第一回大会がサンパウロ市の目抜き通りだったアベニード・ブリガデイロのパラマウント劇場を借り切って開かれたとき、司会をした人物だ（この大会に隣のパラナ州から駆けつけて参加した人が後に書いたものによると、「日本が勝ったというニュースはどこから入手するのか」と質問したところ、沢井は「良いニュースの出所を我々は詮索しないことにしている。そういうことを質問するのは負け組のスパイではないか」となじられて退場を命じられたという）。

吉井碧水という人の草稿「獄中記」によると政治警察の取調室で渡真利は看守からゴム棒で叩かれて「オウ、

オウ」と声をあげていたという。

吉井の手記によるともっとも手厳しく調べられたのは臣連幹部の渡真利とアジト提供者の沢井のようだから、警察も渡真利に目星をつけて何とかして吐かせようとしたに違いない。だが調書によると渡真利は「自分は連盟の理事なので連盟員の行動には責任をもつが、実行したのは連盟員ではない。自分がコントロールできない範囲でおきた不幸な事件だ」と主張し、反対に「もし自分を釈放し、ブラジル政府が連盟を公認したら、連盟はこのような出来事の防止に努力する」と言っている。

一時同房だった吉井の手記によると、連日の取り調べに渡真利はそうとう参っているらしく、「誰かが盗聴している。・夜もあまり眠られない」と不安そうな様子だったという。

しかし前述したように六百人ほども取り調べたのだし、ブラジルで日本語を覚えたサンタナという人などの通訳を介してのやり取りだし、事件は波及的につぎつぎ起こっているし、渡真利が真相を吐くまでの追求はされなかった。すでに述べたように警察もブラジル社会も「集団の狂気」というとらえ方をしていたせいもある。事実、日系社会の様相はそうになっていた。

死者二十三人負傷三十数名。ほぼ九カ月にわたった各

地での事件を調べると、血気にはやった若者たちは口々に「特攻隊」と自称していたが、四月一日と六月二日の襲撃のように組織されたものではない。地方に住む青年たちが同じ地方の目障りな、しかも狙いやすい認識派を襲うという模倣犯的なパターンばかりである（最後のテロ事件は場所こそサンパウロ市で起きているが、勢い込んでサンパウロにやってきた地方青年たちは、日系社会への影響力という点では見当違いの人物をねらい、しかも本人の顔さえしらず別人を襲撃しているので、お粗末な模倣犯と断じてよい）。

一連の騒動の起爆剤となったはじめの特攻隊は勝ち思想のつよい地方から青年をあつめ、アジトを提供し、ほんとうに日系人社会全体に発言力をもつ大物を綿密な計画をたてて襲撃し、目的を達したあとは自首するように指導されていた。

隊長の新屋敷の行方は杳として知れなかった。彼は鹿児島県人で、四十をちよつと過ぎた、体のおおきな気性のあらい男だったという。彼を中心に第二次特攻隊が準備されているという噂はながれたが、実現しなかった。

志願者にも資金にも事欠かないのにそれが実現しなかったのは、オルガナイザーがいなくなつたことを意味するのではないか。地方の志願者をあつめてサンパウロ市へ連れてきても、受け入れる組織も、襲撃目標を指示

する人物もいなくなったのだろう。たぶん、警察に逮捕され勾留されていた人間のなかに「彼」すなわちXも含まれていたにちがいない。

この特攻隊を立案し、組織化した人物は誰だったのだろうか？

それは、サンパウロに住み日系社会全体の勢力図にくわしく、地方青年たちと密接な関係をもち、組織づくりを経験があり、特攻隊の装備や旅費を調達できる資金源を背景にした男でなければならぬ。しかも自らも青年の客気にはやった男・・こう条件をならべると、私にはそのXという人物と、臣道連盟情報部理事・渡真利成一の影が、どうしても、かさなってくる。特攻隊員たちの出身地の中心となったマリリアは渡真利の出身地でもあった。

4 カーキ色の外套の謎

私が臣連のテロ事件を調べはじめたのは、もう三十年以上も前になる。

事件の概要を知ったとき、最初に不思議に感じたのは、第一次特攻隊の隊員たちがカーキ色の外套を着用していたことだった。このことはそれまで臣連のテロについて書かれた本やレポートでは触れてはいても、誰もさした

る問題にしていけないのだが、私にはひどく不審なことに思われた。サンパウロの四月一日という日本は十月一日にあたる。暦では秋といっても、南回帰線が通っているサンパウロでは夜でもシャツ姿で過ごせる。六十年前はいまよりもっと寒い日があったそうだが、それでもサンパウロはサンパウロである。

テロリストとかスパイなどはなるべく目立たない服装をするのが一般の常識ではないだろうか？ それなのにカーキ色の外套を着た十一人ももの集団というのは目立ちすぎる。現に富豪のマタラゾ家のガードマンたちに怪しまれて、日系社会最大の人物、宮腰千葉太への襲撃は失敗している。

私はこのことに個人的な趣向・趣味のようなものを強く感じたのだった。組織の合議ならこんなバカな装備が容認されるとは思えない。たとえ反対があったとしても、それを自分の意見で押し切ることができる人物の発案ではなからうか。

そんな強引なことができたのは臣連内部では渡真利しかいない（このことはおいおい説明する）。

第一次特攻隊が着用したカーキ色の外套は、野村宅襲撃のさいの犯人の遺留品として、新聞に写真がでたし、警察の現場検証の報告にも書かれているが、厚い木綿地のもので、当時は夜警や市場関係者などが使った市販品

で、とくべつに誂えたというようなものではない。しかし、市販品だからといっても全員に同じものを着用させたのは、あきらかに「制服」という意識からであろう。

カーキ色の外套は旧日本軍、それも内地の冬か北支あたりの陸軍の装備のようだ。渡真利がそういう軍国主義的発想をもっているらしいことは推測できたが、それ以上のことは分からなかった。なにしろ、当時はテロの話をしたがらない人も多かったし、渡真利に直接会ったという人にすら行きあえなかった。

・・・その後十年ほどたつて、臣連関係の政治警察の押収資料や調書類がマイクロフィルムになってサンパウロ大学の図書館に入ったという話を聞いたが、そのころの私は自然に関心を抱いてアマゾンなどに入り浸っていて、臣連の事件は関心の外にあった。

それから日本に居をうつし、紀行や推理小説などを書いてきた。ふたたびブラジルに戻ったのはいまから十年ほどまえである。

その間に新しい資料が世にでた。私もいくらか関係していたサンパウロ人文研究所に、渡真利成一の日記、政治警察の調書などのコピー、さらに吉井碧水の手書きの草稿「獄中記」などがあつた。

それによって、今まで知らなかった渡真利の戦時中の

動きの一部や収監されてからの動向などもわかった。

まず、そのことを書いてみる。しかし、この時点では渡真利がなぜ特攻隊員たちにカーキ色の外套を着せたのかという謎は分からなかった。調書にも日記にも、そのヒントになるようなことはまったく触れられていなかった。軍隊式の装備だというなら、それでもよい。しかし、亜熱帯のサンパウロでなぜ冬の装備の外套なのか？ 亜熱帯の装備だってありうるはずだ。ここに私はひっかかるものを感じていた。かつての関心をふたたび呼び覚まされた私は、ついでに古い資料もひっくりかえして見たが、これという新発見はなかった。

渡真利は四月一日のサンパウロ市での二つの襲撃事件のあと、翌日に臣連本部で他の幹部らとともに逮捕され、五日に最初の調書が作成されている。

調書によると、沖縄県石垣島出身、四一歳、小学校卒、既婚、ペーニャ区メルセデス・ロペス22在住、野菜作りとなっている。

かつて私が調べていたころ、ほかの資料などと突き合わせて戦時中の彼を三四、五と推定していたのだが、やや年上だった。戦時中の彼は三十代の後半だった。やや面長だが、髪が濃くずんぐりした体格だという。

渡真利はブラジルにきてコーヒー園で働いたのち、サ

ンタ・アンブロジーナ植民地というところに昭和一二年（？）に入植した。そこはマリリア市から三〇キロメートルの地点で百五十家族ほどの日本人の集団地だった。ここに入植した人の回想によると、この植民地が開設されると、まず日本人会ができ道路の整備をし百五十家族ほどの入植をみた。米や綿をつくり、日本人学校や三軒の雑貨店ができ、毎日いちどマリリア市へ通うジャルデネイラ（小型トラックに椅子をつけた乗合自動車）も走るようになり、運動会、演芸会、剣道や野球大会などときは隣接の植民地からも人がきて、にぎやかで平和な植民地だったという。

彼はここで日本語学校の教師になった。

渡真利の日記によると、戦争中、彼は時局を憂い、マリリア市やアンブロジーナ植民地でそれを語らう仲間もでき、それを赤誠会と名付けたが、終戦の二年まえの年にしばしばサンパウロ市にでている。そしてやっと吉川元陸軍中佐に面会することができ、赤誠会意見書なる文書を提出した。その内容も日記に記しているが、日本人移民は戦後は南方の大東亜共栄圏へ再移住すべきであり、その日にそなえて忠君愛国の精神と行動を養うべし、という内容である。

吉川元陸軍中佐はおなじ陸士十三期生の脇山甚作元大佐とならんでブラジルの日本在郷軍人会の大物だった。

時局を憂慮して、仲間をかたらつて時局懇談会のようなものをときどき開いていた。グループは軍人出身者のほか、嗜んでいた謡の同好会や、家業のクリーニング店の同業者たちが主だった。

この南方再移住論は日本がかかげた大東亜共栄圏という思想に共感し、ナシヨナリズムが勃興して住みにくくなったブラジルを嫌った当時の移民たちの大半が抱いていた夢で、渡真利の独自の考えではないが、脇山や吉川のような陸士十三期生の老人たちにとって、渡真利のよくな行動力のある男でしかも若い仲間を連れてくる者の出現は歓迎すべきことであつた。戦争のために指導者層が壊滅した移民社会を憂いて吉川などが熱心に唱えていた日本精神の議論も、骨子は南方移住論であつた。

吉川たち旧軍人将校は指導者層が壊滅した移民社会をまとめるのは自分たちしかないという自負と使命感があつた。

そこで吉川たちは渡真利らと語らつて「興道社」という結社がうまれた。(ただし、ほぼ同時期にモジの「時局研究会」やカンポス・ジョルドンの木村たちのグループ、またサントス・ジュキア線のグループなどからおなじよくな働きかけが脇山や吉川に対してあり、それらが一緒になっている。臣連の母体について諸説があるのはそのためである。ただ渡真利は圧倒的に日本人集団地がおお

いマリリア地方をバックにしていたので一番重要で実行力もある人物だった）。

渡真利は自分らの提言が吉川に賛同されて、いよいよ興道社として活動をすることに決まると、サンパウロに引越してきた。

日記によると終戦の二年前、つまり昭和十八年（1943）の七月十五日にはじめて吉川と会い赤誠会意見書を手渡した。数日後にまた会い、意見書を読んだ吉川の熱烈な賛同をえた。そして本格的な活動を開始するべく八月二三日に家族をつれてサンパウロ市へ引越している。

いかに彼が憂国の情に逸っていたかは、この期間の短さでも推測できる。

そして吉川の名のもと、興道社という結社が誕生する。だが実際の行動の主体は旧赤誠会である。

（注・赤誠会の秘密保持が厳重だったために実体がわからず、今までは興道社の誕生によって赤誠会は吸収・消滅したかのように考えられていた。事實は逆で、興道社の地方に於ける行動の主体は赤誠会だった）

彼の人間像は日記からもある程度推測できる。小学校卒の学歴なので文章には誤字もおおく、内容も稚拙だが、真情のようなものが迸っている部分もおおい。

日記には八月二十三日の引越しのときサンタ・アンブロジーナ植民地日本人会から感謝状と金一封をうけ、また同植民地の二七名からそれぞれ餞別の金一封をもらったと記している。このような感謝状や餞別をうけるのは、ふつう、植民地では日語教師が辞めるときである。日語教育はすでに当局によって禁止されていたが、植民地では教師として遇されていたことは間違いないだろうし、餞別の人数や金額の多さからいって、彼に人望があつたことが推測できる。トラックで荷物をはこべばサンパウロまで丸一日掛かりの引越しになる。

日語教師時代の渡真利については、もう三十年以上まえの取材ノートに断片的な話が記してある。

「サンパウロ市での文教普及会の講習に、マリリア方面から来た教師で熱心に発言する人がいたが、そのときははっきり名前など覚えていなかったが、あとで考えると、あれが渡真利だったと思う」（日語教師の談話）

そして、これは戦後のことになるが、臣連が発足したとき、「渡真利が臣連の構成を立案作成し、これは大政翼賛会の機構を模倣している」というのは定説になっているが、彼が熱心な日語教師だったとすると、矛盾がないので、私はこの定説をそのまま採用してよいと思う。

「大政翼賛会のパンフレットが戦前に文教普及会に送られ

ていた」という資料とか「文教普及会がそういったものの広報をした」などの資料がべつにあり、これらの断片的な資料を総合すると、彼は戦前に大政翼賛会の機構を文教普及会を通じて知り、パンフレット（あるいはコピー）をずっと所持していて、戦後の臣連機構に使ったのではないかと推測できるからだ。

講習会に参加した教師たちに配るほどパンフレットが日本から送られたとは思えないので、筆写したのではないかと私は推測していて、「講習会で熱心に発言した」という証言などとあわせ、彼が物事を熱心にするタイプだったことの一端がうかがえるように思う。

もう一つ、彼の生い立ちについての想像だが、彼が生まれたのは、たしか、日露戦争がおわった翌年である。戦前の沖縄県のしかも先島で育って小学校卒の学歴にしては彼は内地語の会話が旨すぎる。日記その他の残っている文章は誤字だらけにしる、日語教師の講習会で熱心に発言したり、臣連の理事会をリードしたりする力があつた。内地のどこかで育った時期があつたかと推測している。

日記では、引越して二〇日ほどした九月一四日に「帽子編みの機械が自宅に到着した。狭くなって子供たちが可哀相だが仕方ない」とある。（少年と少女の二人の子供がいた）

彼はペニア区のシャーカラ（家付きの小農地）を借りていくらか野菜もつくったが（当時のペニア区は郊外といってもよい。日記には子供たちが作っていたとある。長男は当時たしか十五歳くらいだったはずである）、おもな収入は行商人として地方で帽子などを売る金を生活費にしていた。もちろん地方へいく目的は運動の同志をえるためだった。日記には憂国の熱情と家族を平穩に養う義務との板挟みになった切ない心情が記されている。また商品が売れて幾らかの金がはいったり、後援者からまとまった金をもらってホッとした気持ちなども率直に書かれている。

具体的に彼らは何をしていたのか？

吉川元中佐は時局懇談会でも二つのことを述べていたといわれる。一つはすでに述べたように、戦時下における邦人の心構えと来るべき南方再移住論である。

もう一つはハツカ栽培と養蚕によって当時の邦人農家は潤っていたが、おもな輸出先はアメリカで、利敵行為になるから自粛するように、という論である（こういうことを吉川が言ったかは、かなり疑問があり、後にふれる）。

当時流布された論によるとハツカは火薬にまぜると起爆力を増す。絹はパラシュートの原料として使われてい

るといふ（ただし、このときはすでにナイロンが発明されていた）。

渡真利たちは元陸軍中佐吉川順治の名のもとに、それらを記したパンフレットを地方へくばり、あわせて興道社の会員を勧誘していたのだった。

興道社の活動はじよじよに奥地に浸透し、養蚕小屋焼き討ち事件やハツカ苗引き抜き事件があいついだ。

5 東谷氏の手記

新しくこれだけのことになったが、カーキ色の外套の謎は依然として解けなかった。調書類はもちろんだが、渡真利の日記にも手掛かりになるようなことは記されていないかった。それまではむしろ饒舌だった日記はサンパウロへ越してきてから、急に用心深くなっている。戦時中の活動のことも一人なのか仲間がいるのかも書かず、ごく曖昧にしか記されていない。なにを「活動」しているのかもわからない。

・・数年前、私はサンパウロの邦字新聞に小説を連載し、そのなかで勝ち組にふれる箇所があった。するとパラナ州在住の東谷朝夫という、当時八十四歳になる方か

らお手紙をいただいた。「貴君の文章には興道社の活動が抜けている。教えたいことがあるので取材に来たらどうか」とあった。

となりのパラナ州といっても一日長距離バスにゆられて行かないといけない。そうやって訪ねていって「日本が勝ったと主張したのは歴史的に正しかった」という議論を一日中間かされた経験が過去になんどもあったので、正直いって億劫だったので、私はそのままにした。

ところが数カ月後に東谷さんから『秘密結社興道社の真実を語る』という、パソコンで印刷された回顧文が送られてきた。

文末に「三月十日 陸軍記念日にこれを記す」とある。「・・・」

陸軍記念日などというものがあったことさえよく知らない私はなんとなくため息をつきながら、それでも読みはじめた。

ところが読みはじめて、すぐにびっくりした。東谷さんはアンブロジーナ植民地から渡真利にしたがってサンパウロにやってきて活動した赤誠会生え抜きのメンバーで、いままで誰も知らなかったこと、調書や渡真利の日記になかったことがびっしりと書かれているではないか。すでに述べたように渡真利の日記には、赤誠会の仲間をサンパウロに連れてきたことはまったく触れていない。

東谷氏の回顧談では、渡真利は陸軍下士教導学校出身で福岡連隊を軍曹で除隊したという。警察の取り調べにたいしては渡真利は「小学校卒」とだけ答えている。ほかの資料でも彼が軍籍にいたことを示すものはない。(いや、一つだけある。ある資料の断片に、のちに渡真利たちと袂をわかつた山之内元大尉が渡真利について「あいつは伍長だけの器量の男さ」と吐き捨てるように言ったことが記されていた。もう三十年より前に見た資料だし、当時は山下清画伯の「軍人の位でいうと・・・」という言い方が流行っていたので、その断片の意味について、さほど深くは追求しなかった。ほかの本でも彼を元軍曹としてあるものもあるが、出所が記されていない)

「渡真利は旧軍人だったのか・・・」

カーキ色の謎にいくらか近づいた思いがした。

手記によると、渡真利にしたがって東谷朝夫、沢田常義、佐藤正信らのサンタ・アンブロジーナに縁のある若者たちもサンパウロにやってきた。若者たちは興道社の挺進隊員として、同志となりかつ秘密を厳守する旨の血判状に署名した。かれらが興道社の挺進隊としてどんな活動をしたかというとまず「日米戦争勃発の時局にたいする心構え」、つぎに「戦時中における敵性産業防止運動にたいする檄文」というパンフレットをたずさえて、マ

リリアなど奥地の養蚕やハツカ栽培が盛んな地方に秘密に配り、運動の同志を獲得する活動だったという。

サンパウロ市のほぼ中央にあるドンペドロ二世公園のちかくの布地問屋街に、佐藤正信の父の正雄が資本をだしてちいさな商店を構え、そこを本拠として活動員たちはその商店員という身分を隠れ蓑にして旅行ライセンスを取得し（戦時中枢軸国民は旅行には許可が必要だった）、地方へ出張してパンフレットなどを配ったのである。

（彼らが配付した二つのパンフレットになんらかのかたちで吉川の名がでていたことは間違いない。ところが日記によると、渡真利が吉川に提出したのは「赤誠会意見書」だけである。これは吉川も同意見で「時局にたいする心構え」というパンフレットになったとして頷ける。しかし、赤誠会の実際の活動は「敵性産業撲滅」が主になっていたらしい。このあたりももつれた紐の一つで、即断をさけながら解いていきたい）

東谷さんの文章はなにぶんにも六十年ちかくも昔のことを記憶で書いているので、日時についてはいくつかの思い違いがあるが、具体的なことはハッキリしていて、他の資料との矛盾もない。挺進隊員が地方へ行くときの携行品の詳細なリストもあり、そこには地図、指令書などどまじって「自決用拳銃」と書いてあった。

「そうだったのか！」

それを読んだとき、目から鱗が落ちたというか、積年の疑問が一挙に氷解した。

これは終戦二年まえのことだ。ブラジルは日本とは国交断絶したが、まだ宣戦布告はしていない。ライセンスさえとれば旅行も自由だ（面倒がつてライセンスをとらずに旅行していた人もいた。言い訳すればなんとかなのという）。また日本人農家なども仕事になんの制約も受けず、むしろ戦争景気に湧いていた。

「日米戦争勃発の時局にたいする心構え」「ハツカ栽培、養蚕の自粛」という謄写版のパンフレットを持ち歩いて、よしブラジルの官憲に咎められたとしても、なんで自決する必要があるだろうか。それなのに会と同志の秘密厳守を誓った血判状であり、自決用のピストルである。しかも自決という言葉は、軍人とか、文民でも大義のために死ぬとき使う言葉ではないだろうか。そのうえに携帯品は地図であり、指令書である。

これは昨日まで地方で農業をしていた移民の若者たちが旅行する携帯品とまるでちがう。

戦時下に単独で行動する軍人の持ち物ではないか？

彼らは当時の、日本陸軍のいわゆる軍偵（軍事探偵）

あるいは挺進斥候にわが身をなぞらえていたのではなか

ろうか？ ブラジルを中国戦線なみの「敵地」とみなして、そこで必死の覚悟で活動した？

東谷氏の手記からはそのようにしか読み取れない。

そうすると十代のおわりから二十代のはじめの、小さいがのんびりした入植地で育った若者たちの小集団をそのように仕立てたのは、指導者つまり渡真利の意思ということになる。それも、やや偏執的ともいえる意向あるいは趣味だ。

・・・でも、いくらなんでも三七、八の男が戦争のないブラジルで軍偵ごつことは幼稚すぎないか？ という疑問もあるだろう（私もそう感じた）。

だが終戦の翌年の三月三十日の深夜から翌翌日の四月一日にかけての、サンパウロ在住の日系要人にたいする大がかりなテロにしても、新屋敷を隊長とする特攻隊の隊員は全員がカーキ色の外套を着ていた。季節は秋だが南回帰線が通るサンパウロではシャツ姿で歩ける気候である。それなのに中国戦線あたりの日本軍人のようなカーキ色の外套を着用するのは異常である。テロを成功させるためにも、そのような異様な服装は不利にきまつている。事実、最初の宮腰千葉太への襲撃は隣接したマタラズ邸のガードマンに怪しまれて断念している。それなのに、なぜカーキ色の外套か？

たどたどしいときえ言える文章で、誤字もおおい彼の日記を読み進むと、指導力と行動力があり周囲から信頼されると同時に、内部に幼稚な部分をもかかえていた男の姿が浮かび上がってくる。(幼稚というより、現実とはなれた夢想的な部分である。この彼の性格は、調査が進むにつれてだんだん明らかになる)

当時の彼に、なにか外部から強力な影響がなかったか？ 当時の彼の思考や行動のモデルがなかったか？ いままでの筋道で、私には当然そういう考えがうかんだ。それは本・あるいは雑誌ではないか？ 戦前から戦後のかかりの時期まで、母国からの影響は活字だけだった。戦後の教育を受けた私には疎い世界だが、それでも戦前の青少年に影響をあたえたらしい幾つかの書名を思いだすことができた。

なかでも私でさえ容易に思いだせるのは山中峰太郎の『敵中横断二百里』である。

いずれにしても彼は軍曹だった。ここまで傍証がそろくと、彼はわが身と本の登場人物を同一視したような気がしてならない。

あるいは、同一視しないまでも、なにか渡真利の行動のヒントが本のなかにないか？

私は『敵中横断三百里』を読んだことはない。読みた

いと思っただが、日本ならともかくいまのブラジルでそんな本にめぐり会うのは、難しい。「いつか日本へ行ったとき調べてみよう」と思うしかなかった。

そうやって数年がすぎたが、まったくの偶然で、知人の家の書架に講談社から昭和四五年にでた復刻判を見つけて借りることができた。オリジナルの単行本発行は昭和六年で、たしか少年倶楽部に連載されたものだ。

読みおわって、東谷さんの手記を読んだとき以上に驚いた。読むまえに期待していたのは行動のヒントがないかということだったが、行動のヒントどころか、『敵中横断三百里』と渡真利が構築した世界はまったくの瓜二つなのだ。

赤誠会の渡真利がつくっていた小世界は『敵中横断三百里』の忠実なコピーだった。

本のなかでは建川（たてかわ）騎兵中尉が軍事探偵として活躍する。そして建川中尉のグループは「建川挺進斥候隊」と呼ばれ、本の巻頭にある斥候隊の記念写真は五名、全員が陸軍の（おそらくカーキ色の）外套！を着て身を寄せ合っている。

そしてサンパウロに秘密に集結した挺進隊員も五名。そして（東谷さんの手記やほかの資料によれば）自分たちを「興道社挺進斥候隊」と名付けた。本のなかでは、

追跡する敵との戦いはすべてピストルだ。ピストルは軍事探偵に不可欠の携帯品なのだ。興道社の斥候隊のメンバーが任務につくときピストルを帯行したことは、東谷さんの手記にある（のちにほかのメンバーでも確認できた）。繰り返すが、日本人移住地の農村地帯へいくのに地図やピストルを持ち歩く必要はまったくなかった。

・ここまで符合すると偶然とは絶対に思えない。おそらく渡真利は斥候長の建川中尉にわが身をなぞらえていたのだ。

6 「敵中横断三百里」

読者のほとんどはこの本の内容を知らないと思うので、簡単に説明したい。

時は日露戦争。乃木将軍が率いる日本軍は旅順の要塞を落としたが、奉天をはさんで大山元帥の日本軍とクロパトキン将軍率いるロシア軍が対峙していた。日本軍は勝っているといっても、ほとんど戦力を消耗していた。それに対してロシア軍は小戦闘をしては退却していく戦術をとっていた。

クロパトキン将軍は司令部がある奉天で戦うつもりなのか、さらに背後にあってシベリア鉄道が通じている鐵

嶺まで退却するつもりなのか、ロシア軍の戦術が分からないと、戦力に余裕のない日本軍はうかつに総攻撃をかけられない情勢だった。

そして建川騎兵中尉に挺進斥候の命令がくだる。その部分を引用する。

『建川中尉が連隊長室へはいつて敬礼すると、

「オオ、待っていたぞ。こちらへ来たまえ」、と平左連隊長は机のまえを指さした。

「ハッ」と建川中尉は机のまえへ行つて、直立不動の姿勢をとった。

すると平左連隊長はジツと建川中尉の顔を見つめながら椅子をたちあがった。手には罫紙の綴りをもっている。

「建川中尉！」

「ハッ」

「中尉にもつとも重大な命令をあたえる」

「……」建川中尉は瞳を輝かした。

（もつとも重大な命令とはなにか？）

「命令！」と連隊長は罫紙に書いてある命令の文を静かに読みはじめた。

中尉は一言も聞きもらすまいと耳をこらす。

命令

中尉は下士以下五名の者を、中隊から選びだし、明後

一月九日早朝に出発せよ。遠く敵軍の後ろへ進み、次の任務を遂行すべし。

- 一、敵軍の動きつつある場所と兵力を搜索せよ。
- 二、敵軍の防衛工事の有り様を詳細に探知せよ。
- 三、敵軍の鉄道運送の様子、および列車に載せている物を調査せよ。
- 四、成し得れば遙に遠く撫順方面の敵軍と土地の様子を搜索せよ。
- 五、成し得れば敵の鉄道と電信線を破壊し、倉庫を焼き捨てよ。

建川中尉は、この命令を聞きおわると、思わず武者震いした。全身の熱血が叫びだした。（ああ、己は武人無上の名誉ある任務を受けた。この任務を己は死んでも全うしなければならぬ！）

翌日、建川中尉は五名の同行者を選び、戦友たちは生きて帰る見込みのない挺進斥候隊のために送別の宴を張る。そして騎上の人となった彼らを見送るのだった。

以後、ロシア兵の外套に身を包んだ彼らは驚異的な苦難に遭遇しながら、敵中はるか鐵嶺まで到達し、鐵嶺駅から奉天にむけて大量の兵隊や物資が運ばれていくのを目撃し、ロシア軍や馬賊の追撃に会いながら辛くも脱出



露軍總司令官クローパトキン(左) 露國軍總司令官タカノハヤシ(右)
 (下) 旅順半島の戦いで戦死した兵士の記念写真、右より、神田上等兵、豊吉軍曹、建川中尉、野田上等兵、大竹上等兵

して、ぐるっと半円をえがく行程をとって自軍の陣営に帰還する。この間、約二十日ほど。敵軍の包囲追跡と厳寒と飢えと戦いながらの奇跡の帰還だった。

作者山中峰太郎は自身も陸軍少尉として近衛歩兵第三連隊に勤めていたとき、建川中尉と、隊員の一人の豊吉軍曹のふたりの聞き書きをもとにして書いた実話だと前書きにある。(本の扉の写真が五人なのは沼田一等卒が欠けているため。沼田は重傷をおって捕らえられ、戦死とされたが、戦後帰還した)

この本を読んで東谷さんが六十年後に書いたものの最後に、わざわざ「陸軍記念日にこれを記す」とあった意味も分かったような気がした。

建川挺進斥候隊の報告に基づき、大山元帥は奉天総攻撃の決断をくだす。そして日本軍の勝利となり、奉天大勝利の日がのちに陸軍記念日と定められたのだ。つまり、赤誠会（すでに興道社となったが）の行動は渡真利のみならず、東谷さんをふくむ他の四名も自分たちを建川挺進斥候隊になぞらえていたと思われる。そして東谷さんが六十年たっても「陸軍記念日にこれを記す」と書き添えずにいられなかったように、彼らの意識は日本軍人だったのだ。つまり赤誠会は日本軍人として行動した。

(私をふくめて) いままで勝ち組テロ事件について書かれたものすべてが見落としていたのは、この点だった。勝ち組テロ事件をブラジル移民のなかの出来事としてのみ扱っていた。だが興道社（のちに臣道連盟と改名）の隠れた中核をなす赤誠会の行動規範は日本陸軍、それも軍事探偵のそれであった。彼らの意識もそうだった。

だから著者によって正反対の結論をだしているような資料や証言でも、赤誠会の行動規範をあてはめればきれいに説明がつく。さらに、秘密保持のための血判状や自決用ピストルなど、今日の目では絵空事におもえるようなことでも、当時の渡真利たちにとって本心からの覚悟だったにちがいない。だから秘密は今日まで守られた。

終戦二年前、挺進隊発足にあたった一九四三年の九月に渡真利がつくった興道社挺進隊の規約は次のようなものだった。

「世界大戦いよいよ終結の近きにあり、大東亜建設も着々と進捗の秋、我が興道社の趣旨もその端を示せり。ここにおいて我等斥候隊員はより以上の決意と覚悟をもって活躍せねば最後の目的は弛緩し困難なり。ゆえに左記項目に血の誓約をなす。

左記

一、皇道精神にもとづき社の趣旨にしたがい行動す。

二、社にいかなる危機生ずるも当員は最後の一人にても目的を貫徹すべし。

三、行動にたいしては長の命令に絶対服従すべし。

四、当員の傷病および災難にたいして共通の責任を負う。

五、経費の責任は斥候長これを負担す。

六、機至らば、本社の役を辞し、本社の目的増進のため隠密的に行動を断行すべし」

ここに書かれていることは『敵中横断三百里』に書かれていることとそっくりである。たとえば六の項目も、敵に囲まれて身動きできなくなったとき、五人の騎馬では目立つので、一人だけ現地人に変装して自軍になんとしてもたどり着いて報告する案が検討されたりしている。それで下士たちは建川中尉が脱出するように要請するのだが、中尉は「皆と一緒に死ぬ」という。本のなかでも緊迫し印象に残る場面である。

そういうところを渡真利はそっくり規約に取り入れている。

そして、この六の項目「機いたらば本社の役を辞し」つまり、興道社と無関係な人間として「隠密的に」何かをするという原則は、戦争が終わったあとも、渡真利とその周辺の行動を検証する際の重要な鍵となる。

サンパウロ市の生地問屋街のはずれに佐藤正信の父が

店を借りて興道社挺進斥候隊がひそかに発足した終戦二年まえというと、日本人にとってブラジルは住みにくくなつたとはいえ、一般のブラジル人にとって戦争は遠い国の話で、この規約のような血判状をつくつたり自決用拳銃を持ち歩いたりする切迫した社会的事情はなにもなかった。渡真利とその一味だけが『敵中横断三百里』の世界をつくりあげ、そのなかに生きようとしていた。

・・・ここまで分かってくると、いままで読み過ごしていた資料の断片の持つ意味もわかるし、また、日本で私の調査に協力してくれる人もいて、ブラジルについては分からない事も調べてくれ、それらを総合すると渡真利という男の心理状態が、かなり、描けるようになった。

第一のことは、彼は退役軍人であるが、自分では「現役の軍人」の意識を持っていたにちがいない、という事だ。

戦前に発行された『パ延長線教育史』に各入植地の教育関係者の寸評があるが、渡真利については「元軍曹で、すべてに軍隊式できびしく、それが入植者たちに評判が良い」と書いてある。

また、彼がのちに書いた手紙には「元大佐や元中佐たちをはじめた運動に、自分は軍人として参加した」とある。元軍人とは書いてない。

彼は鹿児島連隊で軍曹になり、熊本の教導所で一年学んで除隊になったのだが、故郷の宮古島では（調書に石垣島とあるのは、なんらかの誤り）、それまで軍曹まで進んだ者はいなかったもので、帰島したときは島をあげての歓迎だったという。このことも彼にとっては大きな誇りだったにちがいない。

第二の、現実家でありながら、現実とはズレた夢想の世界に生きていたことについて。

戦後十年たった私信で「近く、ブラジル移民の南方再移住について日本政府が動くので、私もなにかと忙しく云々」とある。戦中や戦後すぐはともかく、戦争が終わって十年たったならさすがに誰もそんなことは言わないのに、渡真利はまじめにそんな事を手紙で書いている。さらに、もっと晩年の手紙では「自分は『星の人と語る会』の理事をしている。星の人とは世間で言う宇宙人のことで、人類の将来について語り合うのです」とある。

そのほかにも断片的な資料はあるが、総合すると、彼は一見、現実家であるが、心の中では現実とズレた、いわばバーチャリアリティの世界に生きることができた人間のように思われる。

つまり戦中の彼は現役の軍人として、敵国に放り出されているのだ。だから行動をおこす必要がある。

このような渡真利にたいして、子供るとき移住して、「少年倶楽部」のような軍国調の雑誌を愛読して育った、小さな植民地の四名の若者たちは、渡真利のバーチャルリアリティの世界に易々と引き込まれていったようである。

ところで彼は軍曹である。行動を起こすにしても上からの命令が絶対に必要だった。そうでないと、彼は建川中尉にはなれないのだ。

それが軍隊というものだ。

ここまで資料と推理を積み重ねてくると、彼が日記であれほど吉川（きつかわ）元中佐に会おうとして、なんどもサンパウロに出てきた意味がわかる。そして、会って吉川の賛同をえると、長年住み慣れた場所をはなれて家族をつれてすぐサンパウロに移転した意味もわかる。つまり、サンパウロに移転して吉川元中佐の指揮下にはいることによって、彼は平佐連隊長に指揮される建川中尉とおなじ立場になれるのだ。

アンブロジーナ植民地時代の渡真利とそのグループは『敵中横断二百里』の斥候長や軍事探偵物語の主人公になることを夢想していたにちがいない。そして彼らにすれば、吉川をいただいでサンパウロ市に本拠をもったとき、本物の軍事探偵になった。

そして若者たちは地図、指令書、血書、自決用ピストルを携えてサンパウロ州各地に散った。

しかし、一方の吉川である。

渡真利に会って日の浅い吉川は、渡真利の憂国の情や熱意や行動力を頼もしく感じたにちがいないが、まさか自分が建川中尉に司令部からの命令を伝達した平佐連隊長の立場に擬せられているとは夢にも思わなかっただろう。「戦時下、祖国に忠誠を尽くす」という自分の考えを邦人にひろく伝えてくれとは頼んだが、まさか決死の挺進斥候隊に命令をくださったとは思わなかっただろう。

規約の四、当員の傷病および災難には共同の責任をもつてこれに当たる、の項も、本のなかには脱出におくれた隊員を援護にむかって一命を賭して救出する場面が何度かある。しかし、謡の同好者やクリーニングの同業者をあつめて時局を語らっていた六五、六歳の吉川が、こんな緊迫した状況を想定していたとは、私にはとうてい思えない。彼は観世流謡曲の指導者で、華道や茶道の免状をもち、北白川宮のお付き武官もしたという。

だが渡真利は、吉川から奥地の邦人たちに伝えてくれと託されたパンフレットを、挺進斥候隊への命令とした。そして、「敵中横断三百里」の命令書にあった、

五、成し得れば敵の鉄道と電信線を破壊し、倉庫を焼

き捨てよ、

という命令に置き換えて行動を開始した。

東谷さんの回想には、自分たちが養蚕小屋の焼き討ちやハツカの苗の引き抜きを煽動したことはさすがに書いていない。

しかし、他の人の当時の日記などに「興道社の若い者が泊まっていたが、養蚕小屋の焼き討ちやハツカの苗の引き抜きなど過激なことを喋っていた」（モジ市の田辺氏の日記）という文章もあるし、いままで脈をつかめなかったほかの断片的な記録類も赤誠会の存在によって繋がってくる。

ブラジルの養蚕は屋根裏でする日本などとは違い、屋外の板小屋にチガヤを葺いて六十メートルもの長い養蚕小屋をつくる。それが夜に放火されてつぎつぎに炎上する様子は物凄く、社会不安を煽った。

はじめのうちは被害者の農家は「敵性産業」という後ろめたさから警察に届けなかったそうだが、いつまでも放置されることではない。警察は数人の容疑者を逮捕し、またそれに関連したパンフレットがばらまかれたことも突き止め、パンフレットの檄文に吉川元中佐の名があったので四四年の八月に吉川は国家にたいするサボタージュの容疑で逮捕された。渡真利は逮捕されなかったが、なんだか警察の呼び出しをうけて事情聴取をされている。

当時の警察の記録には「SEKISEIDAN」の文字がある。そういうグループが存在して煽動していたことはキャッチしたが、具体的には掴めなかったようである。

最初に養蚕小屋に放火したのは少年だった、という。動機は、親たちの話を聞いていて、それなら火をつけてやろうと思ったという。そのころはすでに風潮になっていたので、実行犯達が直接に赤誠団から指示されて・・・ということではない。

また松崎留吉なども赤誠団を名乗っていたようなので、赤誠団あるいは赤誠会を自称するグループは、警察の捜査がはじまった時点では複数存在したようだ。

7 赤誠会の動き

私はこの文章の第一稿ともいうべきものを二〇〇六年にサンパウロ新聞に連載した。戦後六一年たったが、当時二十歳から三十歳で実際にテロや焼き討ちにかかわった、あるいは内情をご存じの方たちは八十歳から九十歳でまだお元気な人もおおい。「間違っていることがあったら、ぜひ、ご教示ねがいたい」と前置きして連載したのは、私の推論を世に問う最後のチャンスだと思ったから

だ。

連載中におおくの反響があり、新聞への投書や、直接にメールや電話をいただいたが、私の立論そのものに反対、あるいは異議はなかった。

連載の結論としては立論そのものを変更したり修正する必要はなかったが、思考をふかめたり補強したりすることができた。

その一例として、越村健治という読者の投稿を紹介したい。越村さんは終戦当時十歳だった。終戦二年前の（つまり吉川と渡真利がはじめて会った頃だが）越村さんの父親と吉川との交流について書いている。

投書は「元陸軍中佐 吉川順治の側面」と題し、父がサンパウロで洗濯屋をはじめるのに吉川に仕事の手ほどきをうけたこと、子供が入院したとき退院後しばらく吉川家に世話になったことなど、戦後はとだえたが戦争中の両家に交流があったことを述べ、短歌や漢詩を好んだ父の遺稿のなから吉川をうたったものを紹介している。いくつか引用すると、

花を活け香焚きこめし部屋うちに

釜の湯煮ゆる音のするなり

老翁のたてし薄茶の味わいを

押しただきて舌にあじわう。

尊しや和敬静寂 茶の心
訓えたまえる翁の御顔は

慣るもののごとく無念無我
部屋掃く君を武士（もののふ）と思う

吉川中佐の謡をききて

肅やかに階のぼれば匂いくる
香と謡と睡蓮の花

越村さんは「日本語の使用すらかたく禁じられていた時代に、このような高度な日本文化を味わう会が（吉川の自宅で）持たれていたのであった」と書いている。

吉川が謡をよくしたことはお弟子さんだった鈴木威さんなどから私も聞いていて、渡真利との出会いの部分で、「しかし、謡の同好者やクリーニングの同業者をあつめて時局を語らっていた六五、六歳の吉川が、こんな緊迫した状況を想定していたとは、私にはとうてい思えない。彼は観世流謡曲の指導者で、華道や茶道の免状をもち、北白川宮のお付き武官もしたという」

と書いたのだが、越村さんの投書で吉川家での集まり

の具体的な様子などがあらためて確認できた。私はいろいろな資料の断片から、吉川は軍人らしい国家にたいするつよい忠誠の信念はもっていたにせよ、常識のある、おだやかな性格の人ではなかったかと推測しているので、越村さんの投書はその推測と矛盾しない。

吉川のサンパウロでの家業は洗濯屋だったが、当時の洗濯屋はいまのクリーニング店のような潇洒なものではない。離農して都会へでた家族が、資本もなく言葉もわからなくても家族の労働力だけでできる仕事だった。

そういう生活のなかでも、彼は謡や茶道に心をあそばせる余裕をもった人だった。

これに関連して、渡真利がうけた吉川の指示の内容について疑問がある。

東谷さんの「秘密結社興道社の真実を語る」にあるように、赤誠会のメンバーは「日米戦争勃発の時局にたいする心構え」と「戦時中における敵性産業防止運動にたいする檄文」などのパンフレットをたずさえてサンパウロ州奥地にくぼり、興道社の同志をえる努力をした。

従来は両方とも「吉川の名前で配られた」とだけしてある。つまり、うっかりすると吉川が言いだしたようにとれる。

このうち「日米戦争勃発の時局にたいする心構え」と

いうのは、日頃から吉川も言っていた「祖国に忠誠をつくせ」という論で、吉川の持論であつてもおかしくない。渡真利が吉川に提出した「赤誠会意見書」もほぼおなじ内容である。それだからこそ吉川は渡真利に同調したのだらう。

もう一つの「戦時中における敵性産業防止運動」というのは、吉川が言いだした論とするには大いに疑問がある。

当時は養蚕もハツカ栽培も日本人農家の特技で、それをしてる農家はいわゆる戦争特需で景気がよかった。一方、その景気にくわわれない近辺の日本人農家のあいだで「やっかみ」があつたことも知られている。

いずれにしても、特需の輸出先はアメリカなので、いつのまにか「絹は落下傘の材料。ハツカは爆弾にまぜる」という話がつくられたようだ。日系農家も栽培していたコーヒーや綿もブラジルはアメリカ相手の特需で景気がよかつたのに、養蚕とハツカだけが問題にされたのは「やっかみ」の部分が大きかつたらしい。地方の農家の情報がすくない戦時下のサンパウロで、しかも洗濯屋という農業と無関係な家業をしていた吉川が言いだした話ではないだらう。

むしろハツカ栽培や養蚕農家がおおかつたマリリア出身の渡真利周辺あたりから、その話を聞いたと推測して

も、さほどの無理はない。

ただ、吉川が（誰からにせよ）その話を聞いて「そのような、アメリカを利するものであれば自粛してもらいたい」程度の同意をあらわしたことは考えられる。それで「自粛論」に箔をつけるために吉川の名が利用されたかもしれない。吉川の関知しないところ、つまり地方で、自粛論はいつのまにか防止論になり撲滅論になった（おそらく渡真利の赤誠会ははじめから撲滅論だった）。

興道社のことがいくらか知られるようになってから書かれた本には、渡真利が最初から「敵性産業撲滅論」をひっさげてサンパウロにでてきて、吉川や脇山の熱烈な賛同をえたとしてあるが、まったく賛成できない。吉川の相談相手の脇山元大佐にしても、創成期からブラジル最大の養蚕地帯といわれたバストス（製糸工場や蚕種場など幾つもあった）の農業組合長だった。バストスでは戦時中も絹は増産に次ぐ増産で、外部から「敵性産業論」を言ってくる者もいたが、誰も相手にしなかったということが「バストス二十五年史」などにも書かれている。その農業組合長が養蚕撲滅論などに軽々しく賛同するはずがないと思う。

吉川はサンパウロ市に住んでいて地方のことには疎いし、敬愛する脇山が不賛成なのに「喜んで賛成した」などということとは信じがたい。

私はその本のことを非難しているのではないが、このあたりの見方に狂いがあると、吉川や脇山の性格はちがったものになる。そうすると、その後の興道社↓臣道連盟の性格の見方もちがってくるのではないか。

ハツカの苗引き抜きや養蚕小屋焼き討ち事件が頻発し、DOPS（サンパウロ政治警察）の警部が八月のある晩、「国家にたいするサボタージュ」の容疑で吉川を自宅で逮捕し連行したのだが、取り調べにたいして吉川は素直に容疑を認めたようだ。ただし吉川はポ語はほとんど話せなかったので、通訳を介したにせよ檄文のニュアンスが自分の主張と合っているかどうかまでは釈明できなかったと思う。あるいは分かっているにもかかわらず釈明しなかったか？あるいは釈明したが警察が聞き入れなかったか？

いずれにしても「撲滅運動」のパンフレットに吉川元中佐の名前が使われていたことは事実だろう。DOPSにしても、かつて（日系の重要人物ということ）脇山元大佐を一時勾留したように、元中佐というだけで危険な重要人物という予断もあったと思われる。それは警部みずからが夜分に自宅にでむいて身柄を確保したという記録からも、ある程度推測できる（ほんとうに危険な人物は吉川ではなかったのだが）。

また、吉川周辺の根来や渡真利が事情聴取だけで逮捕

されなかったのは、吉川は檄文のパンフレットがどのようなルートで奥地に配られたかは、口を割らなかつたか、あるいは詳しくは知らなかつたか、どちらかであろう。

(のちの暗殺計画を吉川はじめ根来たち幹部も知らなかつたように、渡真利にはかなり秘密主義のところがある)。

したがってDOPSは赤誠会系の問屋街のアジトについては把握していない。もし把握していたら、渡真利が事情聴取だけですむとは思えないし、東谷たち赤誠会の若者たちも逮捕されたはずである。

臣連のテロについて書かれたフェルナンド・モラエスの「コラソン・スージョス」は、著者がブラジル人のジャーナリストで警察関係の記録の調査はお手のものなので、そういう部分の記述について私も参考になっているのだが、吉川の逮捕についても警察の記録をもとにして述べている。

それによるとDOPSは檄文の本人(吉川)と地方での数人の煽動者と実行者を特定して逮捕しているが、サンパウロから地方への配付ルートについてはハッキリとは特定できなかつたようだ。

「コラソン・スージョス」にSOKOKU AIKOKU

SEKISEIDAN(祖国愛国赤誠団)というグ

ループによってパンフレットが地方へ配付されたとは書いてあるが、グループの実態についての記述はない。そ

ここまで分かっていたいながら、警察は実態をつかめなかった。おそらく、赤誠団の名はサンパウロの興道社関係から漏れたのではなく、地方の逮捕者からでたのだろう。私の推測では、たぶん吉川さえも詳しいことは知らなかったのではないか。

渡真利もこのときに事情聴取をうけているが、容疑が「国家にたいするサボターージュ」という重大なものだけに、さうとう執拗な尋問をうけたはずだ。しかし、彼は自分たちが赤誠団だとは口を割っていない。警察でまず職業を聞かれたとき「ベルドウレイロ（野菜作り）」と答えたにちがいない。じっさいにペニヤ区の家では子供たちが野菜を作っていたので、警察は「単なる野菜作りか」と思ってしまった、彼のもう一つの顔、ビヤジャンテ（行商人）として旅行許可証をもっていたことを見落としたのではなからうか。

ただ担当の刑事はカンで渡真利には「何かありそうだ」と思ったのかもしれない。焼き討ち騒ぎが一応収まったあとも二度ほど呼び出しをかけて事情聴取をしている。最後のとき、そばを通りかかった上司が「なんだ、まだ日本人に関わっているのか」と声をかけたので、鼻白んだ刑事が「もう、帰ってよい」と言ったと日記に記してある。

私がサンパウロ新聞に連載中、外山脩（とやまおさむ）さんが『百年の水流』というブラジル移民史をあつかった本をだした。彼はサンパウロ新聞記者出身のフリージャーナリストなので、インタビューを中心に構成してあるのが特色だ。

勝ち組テロについても扱っているが、「養蚕小屋に放火した」という人に（Fという仮名で）三年まえに会って話を聞いている。

それによると、場所はマリリアで、一九四三年、Fは一八歳当時に一六歳の相棒とふたりで三箇所に分火したという。動機は父親が仲間と養蚕農家を非難して「あれは何とかせねばならん」と憤慨しているのを聞いたため、子供心に義憤をおぼえてやったという。分火したことは誰にも言わなかった。分火した一八歳当時、興道社の名は聞いたことがなかったという。そしてこれはその後の一連の分火のうちの最初の分火事件だったという。

この話は、私がいままで述べてきたことと、ほぼ一致する。赤誠会が興道社として活動を開始したのは一九四三年だが、それ以前にも渡真利たちは地元のマリリアを中心に、ある程度の敵性産業防止（あるいは撲滅）活動はしていた。興道社として活動をはじめたときも、まず

マリリアを拠点としただろうことは、「地方に同志をえる運動のはじめは苦労した。興道社の支部が最初にできたのはマリリアだった」と、彼が記していることから窺える。そのマリリアで最初の放火事件がおきたのも、偶然ではないだろう。ハツカや養蚕農家にたいする反感は漠然とあったのだが、それに「吉川元中佐」の名前をえて、パンフレットをつくり配付し、いわば正義としての組織的な煽動をはじめた。

したがって赤誠会が直接に放火の犯人を作り出す必要はない。東谷さんの手記に「(われわれの運動によって)敵性産業防止運動の効果があらわれた」とだけあるのも、そのあたりの事情をしめしていると思う。

Fと赤誠会とは直接の接点がなかったとしても、そういう風潮を煽っているグループとして、警察はSOKOKU AIKOKU SEKISEIDAN (祖国愛国赤誠団) という名前だけは特定していた。

また『百年の水流』では、渡真利にしたがってサンパウロにやってきた赤誠会のメンバーの一人、佐藤正信さんからも、やはり二年前に話を聞いている。佐藤正信の父が資本をだしてサンパウロの生地問屋街にアジトの店をつくったのだし、戦後のテロで警察に逮捕されてからも、留置場で監房の掃除を買って出て、仲間の情報をあ

ちこちの独房につたえた機転の利く若者として、彼のこ
とを吉井碧水が書いている。その佐藤さんは、質問にた
いして、

「興道社がやったのは、敵性産業の防止運動です。敵性産
業はやめようと説得して歩いたのです。説得です」

と強調している。

「私も地方にでかけたことはあるが、そういう仕事に従事
するのはやめよう、と説得しただけです」

一方、いざというときに備えて、小指を切った血で決
死報国とかいたハンカチに小型のブローニング拳銃をつ
つんで持ち歩いていたともいう。

現在は平穏にくらしている佐藤さんを問いただすつも
りはないが、この二つの話のあいだには、いくらか矛盾
というか温度差がある。

外山さんが話を聞いたときは八十代の半ばなので、二
十代前半のときの活動には或る激しさがあつたと想像し
ても、さほど失礼にはならないのではなからうか。



『敵中横断三百里』の挿絵（樺島勝一画）

ピストル携行は軍事探偵であることの証だった。

なお、渡真利がサンパウロにきてから日記には重要なことはほとんど書かなくなったことは述べたが、やはり書き留めずにはいられなかったとみえて、走り書きのようなメモがかなりある。それらは四月二日に検挙されたときに、警察に押収されたのだが、前後の関連のないメモなので、裁判のとき検察から提出されたが、たいていは決定的な証拠としては採用されなかった。彼自身も

「思い浮かんだことを、その時その時に書き散らしたただけだ」と釈明している。そのメモの一つに、「敵性産業に従事することの非なるを説いて教導覚醒せしめ・・・（略）・・・どうしても覚醒、転向にいたらない極悪なる指導者は抹殺・処理する」と書いている。

「極悪なる指導者は抹殺・処理する」

すくなくとも、戦争中の走り書きに、彼はそう記した。これは戦後の渡真利の思考と行動を読み解くとき、重要な鍵の一つだと思える。

逮捕されるまえに、吉川はすでに自分の思想を書き記していた。これは『吉川精神』という題がつけられ、のちの臣連のバイブルともいうべきものになった。基本は大東亜建設のためにブラジル移民が南洋で貢献すべきこと（南方再移住論）、そのために臣道実践運動をすること、という内容である。

だが、獄中で彼は脳溢血でたおれ、ずっと半身不随になった。

（注・「吉川精神」を獄中で書いたという説が一般的だが、そう言われているだけで裏付けはない。私は逮捕以前に書き上げていたと思いたい。なぜなら興道社の発足は逮捕より一年もまえで、戦争で指導者層が壊滅した日本人移民社会に自分たちの考えをつたえて精神的にまとめたという目的で活動をはじめたのだから、社の発足にあ

たつて社長の吉川がなんらかの指針あるいは信念を文章にするはずで、一年ものあいだ何もしなかったらおかしい。それと間接的な表現ながら敵性産業防止のことに触れている箇所があるが、そのために逮捕されているので容疑を追認するようなことをわざわざ獄中で書くだろうか？ という疑問もある。思うに、獄中で書かれたというのは「吉川精神」の有り難味を増すために、戦後に印刷物として配布するときには言われたことではなからうか？ そして敵性産業防止の部分は、戦後に印刷するさいに、第三者の加筆があつたと私は推測している。これは勅語のような体裁に仕立てられ、家によつては教育勅語とならんで飾られたという)

日記によると「父とも尊敬する吉川中佐」は渡真利の破壊活動のために勾留され、しかも、獄中の不自由さのために脳溢血でたおれた。日記にはこの出来事にたいする渡真利の反省はまったく記されていない。ただただ吉川を慕つて、警察に顔の利く男につれられて面会に訪れている。あるいは吉川の娘のたか子をつうじて獄中の吉川の消息を聞き、日記に記している。

このあたりの心理が私にはいささか不可解なのだが、現実の世界より、自分は建川中尉の世界に生きているという思い込みのほうが強かったとすれば、理解できないこともない。

戦争が終わってからの彼の行動をみると、多分、私の推測は正しいかと思う。戦時中、現実の声は吉川から発せられるのだが、だんだんに、彼の脳裏にはそれより強く幻の連隊長や元帥の「命令」が聞こえていたらしい。そして彼は現役の軍人であり、赤誠会の彼等はずねに戦地に身をおいているのだ。（心理学には詳しくないが、自己催眠のような状態だろうか。）

だから今の考え方だと、吉川は渡真利に名前だけ利用されたといえる。

しかし当時の軍隊式の考えだと、そうではないかもしれない。ルパン島の小野田少尉は発見されたとき「上官の命令」を要求した。命令があれば出る、というのだ。渡真利にしても、吉川の名を利用したのではなく、命令する上官として吉川が必要だったのだ。しかし、渡真利は吉川の命令からはなはだしく逸脱した行為をしていた。それは旧軍隊だとどうなるのだろうか？

・・いずれにせよ、やがて終戦になった。

本来なら彼の破壊的な役割はここで終わるはずだった。彼は行動力があってもとにかく軍曹にすぎなかった。興道社には元大佐、中佐、大尉、少尉など彼よりずっと階級が上で判断力も備わっている人たちがいた。祖国の勝敗はべつとして、「戦争は終わった」という判断のもとに

興道社Ⅱ臣連は行動したにちがいない。そして、その後のテロも起きなかつたはずである。

8 軍使歓迎委員会

昭和二十年八月十五日、終戦。

渡真利は日記にこう記した。

「八月十五日

なんという喜ぶべき日であろう。しかるに、米国のデマに惑わされて日本無条件降伏等と聞き実にケシカラン日なり。一晚中寝れず泣き明かした。十六日という言葉ふ日の夜明けを待つて老人方へ参る。心強いことを言つて下さった。総合して見るに何と日本の大勝利ではないか。嬉しい涙が止めどもなく流れ只喜びで考えも浮かばん。

八月二十二日

確報を掴む、当局に保管せし確報を我が手に捕らえこれを奥地へ送りしことは実にこの上なき我が手柄なり、我が喜びこの上なし。この文を書きつつ、今頃奥地同胞が喜んでるかと思うと実に有り難い。

八月二十五日

奥地行き

九月五日

帰宅」

ここでいう「老人方」というのが誰のことかはハッキリしない。政治警察の手によって拘置場にいる吉川に、家族でもない渡真利が「夜明けを待って」簡単に会えるとは思えないので吉川は除外できるのではないか。「方」とあるので誰かを自宅に訪ねたのだろう。

吉川の不在中、興道社の名目上の最高幹部は山之内清雄元大尉だったが、実務上は根来（ねごろ）良太郎が担っていた。

山之内は吉川と陸士の同期で、瘦身で八字髭をたくわえ物腰の端然とした老人だった。

根来は六二歳。鉦山技師で、根来衆一族の出身であることを誇りにしていた。戦争がはじまってから帰国を希望したが、二度の交換船の選にもれ、日系社会の旧指導者たちを恨んでいたという。

本来なら最高幹部は脇山元大佐がなるべきだが、彼は紀元二千六百年の祭典にブラジル移民代表として日本へ行ったりして、国交断絶のとき当局から危険分子と睨まれて一時収監されたりしたので、表立った動きはできなかった。ただし、脇山などの提案で、農村地帯に興道社の名は通りが悪いといって相談の結果、日本の臣道実践運動から名をとって終戦の一月ほどまえに臣道連盟と変えている。

渡真利の日記からも窺えるように、終戦の翌日の午後あたりから新しいニュース（情報）が飛び交いはじめたらしい。これは当時のおおくの人の日記や証言にある。敗戦の報のショックのあと一日か一日半して虚脱状態がすぎて情報（デマ）が発生して、アツという間にひろがるのは関東大震災などのときもまったくおなじで、そういう心理的なメカニズムが存在するのだろう。

三〇万人の日系社会はアリの巣をつついたようになっていた。誰もがより良い、より新しい情報をもとめて右往左往していた。

日本の大勝利というのはともかくとして、「日本が負けた」というのはアメリカの一方的な発表で、日本は負けていない」あるいは、すくなくとも均等の条件で終戦が成立したという情報はかなり多くの日系人に信じられた。ブラジルの報道でも不意に参戦して進撃をつづけているソ連軍の脅威のほうが重要視されていた。日本の動きよりソ連軍の動きと米国の焦りのほうがニュース価値があった。そういう事情をふまえて、「日本が予定の本土決戦をしても漁夫の利をえるのはソ連だから、日米間で極秘に停戦が成立した」という新情報は、聞く側の心理としてさほど荒唐無稽なものではなかったらしい。

ひとたびその情報が定着すると、その情報に矛盾しな

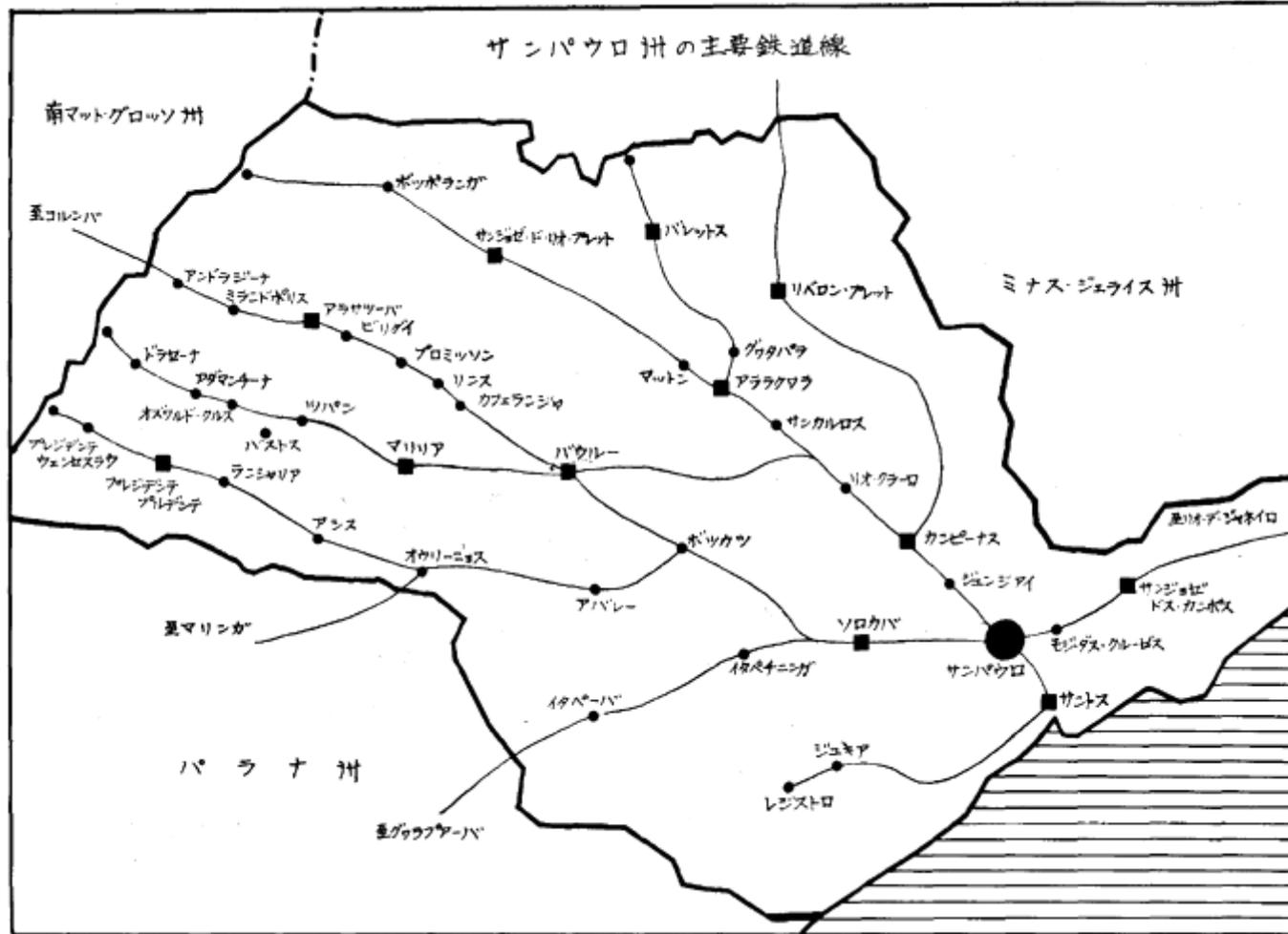
い範囲で派生的な情報（デマ）がつきつぎに流れはじめた。その一つに「終戦処理の軍使がブラジルにも来る」というのがあった。渡真利たちはその情報に飛びついたのである。これが八月二十二日の日記にいう「確報」の内容である。

軍使たちが到着するまえに歓迎委員会をつくり、歓迎費用を調達する必要がある。歓迎会は敵国となったブラジルで苦難の四年をたえた日本人たちの喜びの表現であると同時に、三〇万人の移民の力を軍使たちにみてもらう立派なものでなければならぬ。それだけの大規模な歓迎会をオルガナイズするのは在外公館が撤退し有力会社や民間団体も解体させられたブラジルでは、在郷軍人の力をバックにもつ吉川元中佐の臣道実践グループしかない。

渡真利たちは歓迎委員会の組織つくりのために地方へ急遽出発した。

サンパウロ市を基点とする五本の鉄道線のうち、ノロエステ線とパウリスタ延長線がほぼ平行して州を縦断している。両沿線は穀蔵地帯で日本人移民もそこに集中している。彼が教師をしていたマリリア付近もパウリスタ延長線の一駅である。そのあたりを中心に日系人はサンパウロ全州に分布していた。

サンパウロ州の主要鉄道線



サンパウロ州はほぼ日本の本州の広さである。それを臣連は二〇日かからずに組織化してしまった。そのことは最末端のカルフォルニア植民地支部（戸数三十くらいの小さな入植地らしい）が九月一九日付けで多額の寄附金をサンパウロ市臣道実践グループ（根来自宅）あてに送金していることでもわかる。

しばらくするとサンパウロ本部には金がぞくぞくと集まってきた。日本のためになにかしたいという、移民たちの願いがこめられた金だった。

渡真利が八月二十二日の日記に記した「確報を掴む」というのは、日本から慰問使節団あるいは軍事使節団が来るといふ情報だった。奥地の人の日記（橋浦日記）にも「九月十日。慰問使節団がくる報告がますます濃厚にアラサツーバ市に入ってきた。曰く、有田八郎氏を主班とする二百名の海外同胞慰問使節団軍艦数隻で飛行機に護られて九月十五日ころブラジルに到着する」とある（橋浦氏は中立派的勝ち組なので、情報を書き留めているだけである。臣連が隆盛のときはそっぽを向いて参加せず、落ち目になってから連盟員になったという、いくらか変った人である）。

事実、九月になると歓迎のために日の丸をもった日本人がサンパウロ市にぞくぞくと集まりはじめ、各ホテル

は満員。その数は二千人ともいわれた。

もちろんブラジルの新聞やラジオも大きく取り上げ、日本人で祖国の戦勝を信じている者がおおいことが知れ渡ったが、まだ社会不安とまではいかず、警察当局は「日本が勝つたと信じること自体は犯罪を構成しない」という見解を発表したくらいだ。

臣道実践グループの数人が広報などの手段もなく、たった二十日ほどで日本の本州ほどの面積に散在する人々を組織化できたのは、軍使歓迎の寄附金募集という、移民たちが向こうから飛びついてくる名目と、その主体が脇山や吉川を主にした在郷軍人会だったからだ。しかし同時に、二年間の興道社の運動がかなり浸透していたからでもあるだろう。そうでなければ、時間的に不可能である。

マリリア地方を例にとれば渡真利が山之内元大尉や根来技師を案内して、すでに自分に同調していて力のある旧興道社支部を重点的におさえていけば、あとはそこがうごいて近隣を組織化してくれる。おそらく、そういうやり方だったろう。戦時中、興道社の支部が最初にできたのはマリリアだという。

このやり方は渡真利の日記にある「地方出張が十日ほど」という記述にほぼ適合する。サンパウロ市からパウリスタ線が延び、バウルー市を起点としてパウリスタ延

長線とノロエステ線の二線に鉄道がわかれ、鉄道にそつて数珠玉のようにつらなる日本人集団地のおもな処を回ると、ちようどそのくらいの日程になる（地図参照）。

ということは、カンポス・ド・ジヨルドンなどほかの地方はべつとして、渡真利は赤誠会の勢力範囲だった地方だけを回ったようだ。そして、その地方の力のある臣連支部の幹部は戦時中の渡真利の考えや行動に賛同していた連中が中心になった可能性が大きい。

いくらか余談めくが地図をながめながら移動方法を具体的に想像すると、つぎの集会所まで鉄道を利用した場合もあるだろうが、たいていは地元の同志が車で連れていったらうと思われる。車といっても乗用車をもっている人は少なく、また町の外は道が悪くてつかえないので、おそらくトラックでの移動だった。八月というと日本の二月にあたる。朝晩などかなり冷えるが、みんな意気揚々と、しかし着膨れた姿と征服の進軍のような意気込みで荷台の人となったのではないか。

（これから六年たって芸能使節団・歌手の東海林太郎、三味線豊吉、小唄勝太郎、浪曲篠田実など、当時の日本でも一流の人々がきて、おなじような場所をまわったが、移動はやはりトラックだったと、後年東海林太郎さんから直接聞いた。こちらは反対に一月から二月の暑い時期

だった。公演先で地元の人と芸能団のスタッフとで親善野球試合をしたというから、一流芸能人といっても今から想像できないほどノンビリしていた。東海林さんはセンターを守ったという)。

臣連はアツというまに会員二万、家族を併せて十二万人と呼号する団体に膨れ上がったが、精神運動、平和団体の旗印はかかげても、各支部（とくにマリリア周辺）の核の部分に戦中の渡真利の破壊活動の根が息づいていたことは推測できる。

9 仲間割れ

根来の自宅を仮事務所に行っている臣連には金がジャブジャブ入って来はじめた。

前述のように九月十五日前後に軍使団歓迎の日本人がサンパウロに終結し、サントス港へ着いた、いやリオへ回航した、という大騒ぎのあと、十月になると国際社会の混乱を避けるため軍使団の派遣は延期されたという情報（デマ）がでて、サンパウロは外見は落ちついた。

その情報をうけて山之内たち軍人派は、「いちおう、寄附金は返して情勢を見よう」と提案した。

これに対して根来とその側近は、

「いや、いままでに費用も掛かっているし、すぐ返す必要はないだろう。せつかく出来た組織をしつかりさせるために、この金はグループのために使い、働いている者たちも有給にしよう」

という案をだした。

根来のいうことも、まったくでたらめではないが、軍人派の立場としては、

「それでは正義がとおらない。それならそれで、別にちゃんと金を集めればいい」

という正論だった。しかし根来はあくまで自説を主張する。

鉱山技師の根来は戦前は三井グループが開発していた鉱山の仕事を請け負ったりして羽振りも良かったが、日本の企業も引き上げた戦争中は食うに困って知人と二人でタドンの製造をしてうまくいかなかった。訪ねた人によると、自分で腕まくりして炭の粉を丸めていたという。農村は潤っていたがサンパウロ市では誰もがロクな仕事のない時代ではあった。しかも六十二歳である。思いがけず入ってくる大金に、いくらかは目がくらんだとしてもしかたない。

あるいは組織を維持するには資金が闊達なほどよい、という現実論だったかもしれない。

いずれにしても山之内たちはこの提案に激昂した。臣

連といっても実態は在郷軍人たちの名前があるからこそ寄附金が集まったのだ。軍人の立場からは決して私物化してはならない金である。

激しい議論の応酬があったが、根来は頑として譲らない。金は根来が保管している。警察に訴えられる筋合いのことではない。

対立の理由が寄附金問題だけだったかどうかは不明だが、結局、山之内たち軍人派は臣連を見限って去ることにした（注・山之内はのちに取材をうけても、この経緯についてハッキリしたことは喋っていない。山之内たちはすぐ「在郷軍人会」を結成して一般人の会員を募りはじめた。八月のときとおなじ地方へあらためて会員募集に行ったりしたが、すでに臣連の組織が固まっていたのでさほどの成果はあがらなかった）。

臣道連盟は終戦の一カ月まえに興道社から臣連に名前は変えた。終戦後の十月十八日に理事などをきめる最初の会合があった。

渡真利の日記。

『十月十八日、木曜。』

岸本定男につれられて吉川氏をたずねる。まるで父のようだ。言いたいことは沢山あるが岸本に気をつけねば。

（注・岸本は警察に顔がきく帰化ブラジル人。黒竜会ブラ

ジル支部長を自称して日系人に睨みをきかす一方、ブラジル警察の御用聞きのような仕事もしていた人物)

おなじ日、最初の会合が間宮宅でひらかれた。間宮の軽率さに困惑する。理事に値するだろうか？ 根来氏が彼を理事にしたのだが、慎重さが欠けているように思う』

渡真利は情報部理事の役名をあたえられた。臣道連盟は寄附金を着服し、さらに各支部の毎月の会費から五分の三を本部送金させて維持費にあてることを決めた。会員へのサービスは「臣連ニウス」と機関誌「臣道」の発行である。これは渡真利の情報部の仕事になる。

戦争が終わって三ヶ月後の二十年十一月にようやく吉川が釈放された。

「国家に対するサボタージュ」というのは重罪の部類、あるいはややこしい容疑らしく、戦争がおわったからといって、簡単に、自動的に釈放されたのではない。資金ができた臣連が弁護士を依頼して釈放された。

吉川順治元陸軍中佐は移民社会の退役軍人としてはバストス町在住の脇山甚作元陸軍大佐とならぶ大物だった。数カ月後に再び吉川が警察に逮捕されたときの調書には「大正十二年退官、昭和十年ブラジルに移住。七人の子供あり。地方にて農業に従事するも成功せず、サンパウロ市で小さな洗濯屋を開業、子供たちとともに働いていた」

という内容の略歴が記されている。

(店はベルゲイロ通りにあった。特攻隊を支援した小笠原亀五郎のオリエント洗濯店とおなじ通りになる)

渡真利は吉川釈放の感激を日記に記している。

『十一月十五日 土曜

吉川中佐はめでたく出獄。天使がつかわされたような気がする。この人は何万人の味方にもまざる』

しかし渡真利成一の、この熱い期待は叶えられたとは思えない。吉川はすでに六八歳になっていた。獄中で脳溢血の発作に襲われたのでその後遺症ではないかと推察されるのだが、一年三ヶ月の獄中生活のあと出獄した彼は、肉体的にも精神的にも別人のように弱々しくなっていた。かつての恰幅の良さはなくなっていた。

吉川の名は連盟の護符であり金看板であるから、出獄した吉川はすぐ理事長に就任したが、根来一派をおさえる力はなく、根来は専務になり実権をにぎっていた。

しかし本当の実権というか、臣連という組織を動かす行動力は根来ではなく、渡真利のものだった。

出獄した吉川は臣道実践運動の中核だった軍人派が訣別したことや、コロニア(日系人社会)で勝ち組と負け組との対立が予想をこえて深刻になっていることなどに驚愕したらしい。彼は自分の体が利かないので人をつう

じて、軍人派の呼び戻しをはかったり、負け組との対話を
実現しようとする努力したが、そのどれも成功しなかった。
軍人派は自分たちの城（在郷軍人会）にこもってしまったし、
勝ち負けの対立は人をつうじて話し合えるという
程度の時期を失っていた。



臣連会員に配られた吉川中佐の写真

会員たちはこの写真のような人物に指導されていると思った。

この、「人をつうじて」というのは「戦後十年史」（パ
ウリスタ新聞社）の表現だが、「狂信」高木俊明（朝日新
聞社）のなかの山之内の談によると吉川は根来や渡真利
に頼んだらしい。対立を煽っている本人たちが行ったこ

とになる。これでは話し合いが旨くいく筈がない。と同時に、吉川には獄中の一年三ヶ月に変化した人間関係がまるで分かっていなかったのだろう。

渡真利は吉川にたいしての敬愛は失わなかったにちがいない。しかし「何万の味方にもまさる」と書いた期待は満たされないことも知ったにちがいない。渡真利が慕っていたのは一年前の、老いてはいるが毅然として凜とした吉川であった（注・脇山元大佐は吉川について

「退官しなかったらもつと上の階級まで行ける、能力のある軍人だった」と語ったことがある）。いまの脳溢血の後遺症のためにヨボヨボして涙もろくなった老人ではない。彼は右半身が麻痺して、着替えや立ち振る舞いにも付添いが必要だった。左脳に障害があつて理論的な思考がむずかしくなつたと推測される。最初の機関紙「臣連」第1号には本来なら彼の巻頭言なり論文が載つてしかるべきだが、「母を恋うる記」という自分を幼児に見立てた感傷的な随筆が載っているだけだ。

（日本の戦勝を讃える文章ではなく、あえて「母を恋うる記」を書いたのは、この時期に吉川はすでに祖国の敗戦を認識していたからではないかと、私は推測する。脇山はすでに敗戦を認識したし、山ノ内や薬師神が臣連と別れたのも寄付金の問題だけではなく、敗戦の可能性を

悟ったためだという可能性もある。将校クラスの理性と判断力をすれば、これは当然の成り行きである。

吉川が臣連を離れなかったのは、もともとは精神運動であり、勝ち負けのことは時期がくれば判ることだと考えていたからではないだろうか。



あたらしく借りた臣連本部

10 再びカーキ色の外套について

渡真利は情報部理事として月給千二百クルーゼーロの高給を支給されるようになった。臣連本部の帳簿には千三百クルゼーロと記入したのもあるが、いずれにしても妻子の糊口を凌ぐため麦わら帽子を売り歩いていた数カ月まえと比べてなんといい違いだろう。しかも「臣連ニウス」も機関紙「臣連」も川端三郎など筆の立つスタッフがいいて、彼はさほどわずらうこともない。

常識的にいえば我が世の春ではないだろうか。どこへ行っても（勝ち組のあいだでは）下へもおかぬもてなしを受ける。この優雅な生活をいつまでも続けたいと思うのが常識ではないだろうか？

しかし、組織作りが一段落したあと、（パズルの嵌め絵が完成したいま、断言できるが）彼はふたたび建川中尉の世界に戻ってしまったらしい。戦争が終わったという新しい事態は彼の脳裏には無縁だったらしい。三つのことに着手している。

第一は自分に命令する者を探すこと。

第二は地方支部の人間たちを戦中とおなじように（実力行動を前提にして）挺進斥候隊として訓練すること。

そして第三に、ひそかに暗殺名簿を作成しはじめた。

このなかで、彼の内面にとっては第一のことがもつとも深刻だったかもしれない。

彼は軍曹である。命令されて動く。

そのために吉川や脇山の知遇をえた。ところが、吉川元中佐は半身不随、言葉さえ不明瞭で涙もろくなっている。脇山元大佐は終戦の御詔勅をきいて号泣し敗戦派になつてしまった。山之内元大尉や薬師神元少尉は臣連と袂をわかつて在郷軍人会に引っ込んで、一般人を会員にする運動をしている。いまではむしろ臣連のライバルだ。彼に命令してくれる上官は一人もいなくなった。臣連には根来がいるが偏屈な老人にすぎないし、それに軍人ではない。

彼は自分が軍曹であることを知っている。それなのに会員二万人、家族をあわせて十二万人という途方もない団体の牽引役になつてしまった。

得意というより、むしろ心細かったかもしれない。(指導力の欠如という点では十月十八日に決まった理事たちも似たり寄つたりであったが)

渡真利はあれだけ吉川を慕っていたながら、吉川のいう精神運動はせずに、吉川の不利になることばかりしている。実際の「上官の命令」は建川中尉と同一視した己の

頭のなかから発せられるのだ。

それにもかかわらず、彼は「命令してくれる人物」を一生懸命に探していた形跡がある。それはなにか日本と繋がりがある人物でなければならぬ。吉川が元にしる日本陸軍の中佐であったように、「日本」を背後にひかえた人物。

そのころ、彼が必死になって探していたのは日本の軍事探偵である。開戦で祖国の出先機関はすべて引き上げたが、ブラジルの情報を日本へ知らせる任務をおびた軍事探偵あるいは特務機関の者が潜入しているにちがいない、と思った人はかなりいた。確証はないが、なんとなく、そういうことがあっておかしくないと思えたのだ。ところが、(現役の)日本軍人軍曹である渡真利の場合、絶対にそうでなくてはならない。その人物が彼に指令を与え、彼の行為を軍人として正当化するのだ(彼が探していた軍事探偵は、テロの実行が秒読みにはいった三月二十二日まで会えなかった)。

第二のこと。

戦中の興道社挺進斥候隊とそっくりのことを、彼は情報部の名のもとに地方支部へ命じている。つまり彼は戦争がおわっても、なにも変わらなかったし、変わろうとしなかった(というより、戦争中にできなかつたことを、

これから仕上げようとしていた)。

彼が戦時中の興道社(というより赤誠会)の方式を再開し、会員の軍国主義的傾向をますます強めていたことは、臣連の各支部から本部の情報部あての連絡などを見るとわかる。

情報部あての通信は出先の部隊から司令部へおくる雰
囲気のものがほとんどである。たとえば「我が支部は○
○地方の偵察を完了せり」(アラサツバ支部)とか(○
○地方は原文のままである。こんな連絡方法を普通の農民が自発的にするとは思えない)「本部は(認識派にたいし)挺身隊を派遣せよ。本部が出さなければ、要請あれば当支部が出す」(ルセリア支部)「当支部の挺身隊待機完了」(ツツパン支部)などというものである。これは三
十年以上もまえに当時の関係者が保存していたものを見
せてもらったのだが、A4の半分くらいの大きさのザラ
紙で支部名や通信欄などがあったと記憶している。軍隊
などでもこんな用紙をつかっていたのかもしれない。
マリリアをはじめこれらの支部は昭和十年代の移民が
おおかった。日本で軍国主義で育ったから、軍隊式をす
ぐ気に入ったのである。そして彼らも兵隊ごっこをはじめ
めた。

このことは私の今の印象だけでなく、すでに當時に感
じた人もいて、ある支部から本部への苦言として「臣連

に加盟してなにがしかの役職をうると、急に偉そうにしたり好戦的な態度や言動をする人がおおい。だが臣連の真の目的はもつと精神的な運動ではないのか。本部の正しい指導を求む」という通信も残っている（やはりおなじ関係者の保存資料。好戦的な態度や言動という指摘は、のちのテロにつながる素地として無視できない）。

この苦言は吉川たちが指導者なら、そうなたらう。だが戦後、爆発的にふえた会員を獲得した行動の原動力は渡真利の興道社時代のマリリア方面の支援者たちだったから、渡真利が変わらないかぎり彼らも変わらなかったし、それ以上に渡真利の積極的な指導のもと新会員のあいだにも挺進斥候隊気分、そして好戦的な言動はますます浸透していった（支部からの連絡はほとんどが挺身隊と書いてある。戦中は挺進斥候隊だが、戦後は挺身隊となった）。

渡真利は日記のなかで、「（臣連の運営について）自分が横暴で専制的すぎると会議で非難された。もつともだと自分でも思うが、自分がやらなかったら誰がやるか？」と書いている（終戦の翌年の一月八日付。日記はすべて原文のままだが、この日付と十一月十五日の吉川が釈放されて「天使がつかわされたようだ」という項だけは、取り調べ当時に、日本語に堪能なマリオ・ミランダ弁護士がポルトガル語に訳したものを使ってみた。ポ語訳の

ほうがずっとしつかりした文章の感じになっている。マリオ・ミランダ著「SHINDO RENMEI」という本から引用した)。

ところで、サ紙に連載したとき読者からいろいろな反応があったが、カーキ色の外套と「敵中横断三百里」に関するものがおおかった。それは私の疑問の出発点であり、到達点なので、(同意する、しないは別として)私の議論の問題点をおおくの読者に正確にうけとめていただけたと、思っている。ここで読者とのやりとりを書き留めておきたい。

まずカーキ色に外套について。

ポルトガル語の興味深いメールを送ってきたのはデニス・ヨシオ・オガサワラという方で、「読むのは日本語もいけるが、書くのはポルトガル語で勘弁してほしい」と前書きがあつて、私のつぎの文章に疑問をよせた。

「特攻隊の隊員は全員がカーキ色の外套を着ていた。季節は秋だが南回歸線が通るサンパウロではシャツ姿で歩ける気候である」

それにたいしてデニスさんは、

「六十年前のサンパウロ市の気候は、今よりずっと寒かったのではないか。ガロア(霧雨)も多かつただろうし、外套は必要だったのではないか?」

という疑問を提出された。



野村宅襲撃のさいの遺留品の外套と靴

これはもつともな疑問で、都市化によつてサンパウロの気温がかなり上昇しているだろうことは、容易に同意できる。かつてはサンパウロ名物だったガロアも少なくなつた。以前はサンバやショーロの曲に「ガロア」がつ

いた題名がたくさんあったが、今はそんな曲もつくられなくなった、とデニスさんはいう。たしかに、霧雨のなかを失恋した女が忍び泣きながら歩いていく、という歌詞を私も覚えてる。

私がこの疑問をいだいたのは三十年前のことだし、さらに三十年前の三月の末から四月のはじめにかけてどの程度寒かったかどうかは气象台にいつて調べないと本当のことは分からないのだが、こういうご指摘は書き手にとって反省にも勉強にもなる。

デニスさん以外のおおくの人も、子供のころの記憶として「いまより寒かった」という。かつてはサンパウロ市のまわりを森林が囲んでいて、サントスの海からの風が海岸山脈で急に冷やされ、午後四時すぎには決まったように霧雨となってサンパウロ市に吹きつけたという。いまはそういう現象はすくなくて、午後でもたいてい日がさしている。霧雨と晴れでは地上の気温がちがうのは当然だ。

ところで、小笠原夕虹（ゆうにじ）というところニア（日系社会）では知られた歌人だが、身辺雑記を書き残した「無野」という文章に、つぎのようなくだりがある。

『家の筋向かいの通りに特務機関とか言われる日本人が住んでいましたが、ある霧のふかい朝、妹がパンを買って

の帰りに「日本人のモツソが草原を走ってきて、アラメの柵をくぐるとき靴が引っ掛かって落ちたのを拾わずに走っていった。変な日本人」と言いましたが、それが野村さんをやったコロニアの特攻隊だったことが後でわかりました。走って行って特務機関の家に隠れたらしかったのです。それから二、三日後、その通りの入口には機関銃を構えた兵士が立ちました』

この文章にある特務機関の家というのは臣連の本部のことだが、この、妹さんの目撃談が正しいことは、ほかの証言でも確かめられる。朝川仁三郎という人物が臣連本部に泊まっていると、まだ薄暗い時刻に扉をはげしく叩く者がいて、開けると、上着は幾筋も引き裂かれ、下半身は泥まみれの山下広美（野村襲撃の特攻隊員の一人）が立っていた、という内容です（「狂信」所載）。

（注・私がたびたび引用する「狂信」は終戦から六年半ほどたった時にブラジルに滞在した脚本家の著者によって纏められたものなので、「戦後十年史」パウリスタ新聞社刊とならんで、勝ち組についてのものもっとも初期の記述として参考になる。ただし、高木氏の情報源はおもにパウリスタ新聞の若い記者たちからで、勝ち組から情報の確認がとれなかった当時の事情から、記述が間違っている場合は両方とも間違っている）

朝川は襲撃のとき上着が引き裂かれたと思ったようだ

が、妹さんの目撃では、薄暗い野原を夢中で逃げてくる途中でそうならしい。当時のアベニーダ・ジャバクアラはまだ土道で、空き地のほうがおおく、有刺鉄線で囲っていたから、山下（妹さんがみたモツソー若い男）はあちこちで針金（アラメ）に引っ掛かったと私は思う。野村家から臣連本部までは私の推測では二キロメートルほどの距離です。犯行後の山下の動揺ぶりをみると、けっして彼らが根っからの殺人者でなかったことが分かる。

（なお、臣連本部はパラカツ通り九八番にあり、当時はプラサ・ダ・アルボレより先をジャバクアラ区と呼んでいたというので、どの本にもジャバクアラ区と書いてあるが、現在はサウデ区になる）

うら若き女性が朝のパンを買ってきて、室内にはコーヒーの香りが漂っている日常的な家庭と、筋向かいでは人殺しをしたばかりの二一歳の若者が隠れ家をもとめてはげしく扉を叩いている・まるでドラマの一シーンのような情景だが、夕虹氏の文章で興味深いのは「霧のふかい朝」とあることで、朝霧は、晴天の夜で放射熱の作用で地表が冷えたときに生ずる。したがって、その朝もある程度の冷え込みがあったはずである。だが外套がいくらほど冷えたかどうかは、分からない。ただし、今のサンパウロでは四月一日に濃霧が発生することはほとんど

ない。

六〇年前のサンパウロは今よりもっと寒かった筈だというデニスさんのご指摘は、いわば外套必要説で傾聴の必要はあるが、私の外套制服説は、それでも正しいと思う。

野村氏襲撃のあと、真先に現場へ駆けつけた一人の河合武夫さんから私は詳しい話を聞いたのだが、犯人たちが二着の外套を遺留品として残したのは、阻止しようとした野村氏の妻と揉み合いになって外套が脱げたらしいのだ。つまり、その程度の動作で二着も脱げるのは、彼らが外套のボタンをかけていなかったことを示しているのではないか？ 外套が必要なほど寒かったらボタンをかけていた筈である。これが私の外套制服説の根拠の一つです。

襲撃者の一人は「(邪魔なので) 脱ぎ捨ててきた」とも言っている。夢中だったはずなので、その記憶が正確かどうかは分からないが。

なお、ポルトガル語で臣連テロについて書かれた本あるいは文章は地方誌めいたものも入れるとこれまでに三〇冊くらいあるようだが、今でもいちばん読まれているのがフェルナンド・モラエスの「コラソン・スージョス」です。ここには「黄色い外套 (カツパ・アマレラ)」とし

てある。戦後はやい時期の日本語の報道では「カーキ色」となっている。鑑識が写した証拠写真もいろいろな本に引用されているが白黒写真なので本当の色はわからないが、タンポポのような明るい黄色でないことは確かだ。黄土色とするのがいいかもしれない。日本語ではやはりカーキ色だろう。私も三十年以上まえに類似品を見たことがあるが、現在身の回りにあるもので比較すると段ボールの箱の色がかなり似ている。汚れを目立たなくするため、あれよりやや濃い色だ。しかし茶色そのものではない。

この外套は朝市の従業員や夜警などが着ていたもので、テロ団の特注品ではない。いまは見かけないが当時はありふれた品物だ。だから「ありふれた物」として、たいていの著者からは無視されていたが、それは記録の字面だけみて、想像力を働かせなかったからではなからうか。当時のサンパウロ市では日本人の集団というだけで、すでに目立つ。しかも若者たちの集団で、十一人もがおなじ外套を着ていたら、ひどく目立ったにちがいない。テロリストの服装としてはひどく不利で、これは或る固定観念から生まれた服装だと私は思ったのだ。その固定観念は「敵中横断三百里」の世界だと、すでに書いた。

六十年たつと人も変わるように都市も変わる。当時の

四月一日ころのサンパウロ市の気候は外套が必要だったかどうかという読者諸氏との議論は楽しかったのだが、実をいうと、特攻隊の装備としての外套は気候とは無関係なのだ。確証がある。細切れの新聞連載では時間的に前後した記述をすると煩雑になるのでおおくのことを省略したので、読者には申し訳なかったが、実は渡真利とその周辺の動きを推測するためにはもつとも重大なことだ。

テロが起きた前年の十一月二十日にすでに「推進隊用合羽二着」の支出が臣連の帳簿に記録されていて、検査はこの帳簿の記載も臣連と特攻隊の関係をしめすものとして裁判の証拠として提出しているのだ。

このことはほとんどの本に引用されているが、（私を含めて）ほんとうの意味がわからずに、単に臣連とテロのかかわり示す検察側の証拠として引用しているだけだった。私にしても東谷さんの手記がでて、渡真利に的を絞りはじめてから、ほんとうの意味が理解できた。つまり漠然と「臣連とテロとのかかわり」としたのではひどく曖昧になってしまい、検察も（結果的には）臣連幹部十人をひとまとめにしたのだし、なかには臣連とテロは無関係だという人もでてくる。この帳簿の意味は「臣連情報部理事の渡真利一派とテロとのかかわり」として読む必要がある。

十一月という日本は五月で、これから暑くなるとうとする時期だ。だから外套は気候のためではなく、制服として購入されたことが分かる。

十一月に二人の隊員がはじめて応募したのでらう。後に逮捕された隊員の供述によるとほとんどの隊員がサンパウロに集結したのは暑いさかりの二月（日本の八月）である。隊員が集まるにつれて、支援者によって外套は購入されたと言言もある。したがって外套と季節は無関係で、日本陸軍に似せた特攻隊の装備として外套は購入されたとは私は確信している。

さらに、終戦後三カ月というはやい時期に最初の外套が購入されたことは、ひじょうに重大な事実を暗示している。

勝ち負けの対立がぬきさしならぬものになってから負け組要人暗殺の機運が勝ち組のあいだに生じたようにこれまで一般には理解されていたが、その考えだとこれほど早い時期に隊員を募集し、制服まで決めていたことが説明できない。

因果関係は逆だったにちがいない。

英文の終戦のご詔勅が翻訳されて要人たちがサインしたのが十月四日だった。そして敗戦の事実を知らせるべく配付をはじめた。

建川中尉の世界に生きていた渡真利伍長とその周囲は、彼が十月十八日情報部理事に就任するや破壊活動のターゲットをいち早く要人暗殺にきりかえて（勝ち組の人々も、敗戦を殺そうなどと誰も思っていなかった時期だ）、戦中に苗引き抜きや焼き討ちの同調者をだんだん増やしていったと同じ手法で（しかし今度は情報部理事という立場を利用して急速に）奥地に暗殺機運を盛り上げていった、というのが私の新らしい見解だ。この見解に立たないと「十一月二十日、挺身隊用合羽購入」は説明できない。

つまりブラジル勝ち組の大きかりなテロ事件は、すでにあつた軍国主義的精神を鼓舞し、さらに暗殺機運を誘導する操作によって起こつた。そして特攻隊の実行が引き金になつた。「敗戦を殺せ」「殺せ」という出所不明の執拗な囁きがマリリアを中心とした地方に繰り返され、若者たちはそれが自発的な意思であるかのように思つて行動に移つた。そして、その囁きは「敵中横断三百里」と自己を同一視しているグループから出た。その手法は戦中から一貫していて、軍事探偵の任務として遂行された・これが私がこの文章であきらかにしようとしている構図なのだ。

なお「合羽購入」が一度だけしか帳簿に記入されなかつたのは、ほかの理事たちも挺身隊のほんとうの意味

を知らなかったから支出を容認したからで、挺身隊が暗殺団として形を整えはじめると、渡真利たちは計画も経理も臣連理事会とは切り離して進めただろう。そのまえの九月に「挺身隊結成費用として沢井に二五〇クルゼーロ支給」と、一回だけ費用の明細が帳簿にあるものもおなじ理由だと思う。臣連結成のごく初期だから、ほかの理事たちも挺身隊を活動的な青年部くらいにしか考えなかったようだ。（これは後の調書にもうかがえる）

といっても他の理事たちがまったく羊の群れだったというのではない。強硬な勝ち組だし、出発が旧軍人主体だったから今は民間人だけの団体になっても日本軍の威光をバックにして負け組にたいして睨みを利かす・・という立場の人達だった。それは四月二日の本部の手入れとき、一つの棚のなかに武器弾薬が入っていたことや、近くに住む小笠原夕虹さんが「特務機関の家」と呼んでいたことなどでも、ある程度は分かる。しかし、吉川は無論のこと、ほかのほとんどの理事たちが「認識派を暗殺しよう」などと指導しなかったことは確かだ。

渡真利は終戦二年前にサンパウロに出てきてから日記には重要なことは書かなくなったが、帳面に走り書きのようなメモはかなり残していた。そのメモの一つに「敵性産業に従事することの非なることを説いて教導覚醒せ

しめ・・どうしても覚醒、転向にいたらない極悪なる指導者は、抹殺、処理する」とあったことはすでに記した。「極悪なる指導者は抹殺する」という考えは「戦争が終わった」という新事態になっても彼の頭のなかでは変わらなかったと思う。

というより（推測になるが）、「指導者を抹殺する」という戦争中には達成できなかったことを、臣連情報部理事になったいまこそ「いよいよやる」というつもりではないか。「成し得れば敵の鉄道と電信線を破壊し、倉庫を焼き捨てよ」その命令を実行しないと、軍事探偵にはなれない。

彼は長男として二人の弟とともに移住したが、いちばん下の弟さんは日本へ帰り出征し、戦死された（これは連載のあと日本の人が教えてくれたことで、いままで知られていなかった）。祖国との連絡は途絶えていたから戦死したことはまだ知らなかっただろうが、「自分はブラジルにいても弟にまけずに、敵をやっつける」という気持ちになかっただろうか。

すべての鍵は「敵中横断三百里」のなかにある。建川中尉になりきって敵地に生きていた渡真利たちにとって、いつも「敵」が必要だった。戦争が終わったのでアメリカへの輸出産業はもう「敵」ではなくなった。それで新しい「敵」を作った。

これはテレビゲームの世界に似ている、と今の若い人なら言うかもしれない。敵がいなければゲームは成立しない。ゲームが成立しないと彼らの存在そのものも画面から消えてしまう。しかし彼らは「人間狩り」という最も危険なゲームをはじめた。

渡真利の、やはりおなじ帳面のメモとして、A、B、Cにランクづけられた負け組（認識派）要人のリストがある。

これは特攻隊の若者たちが所持していた暗殺リストとまったく同じで、警察はこのことについても渡真利を厳しく追求したが、彼は「認識運動をしている人の名を思いつくままに記しただけだ」と言い張った。メモには暗殺などとは書いてない。人名が並べてあるだけだ。しかし、サンパウロ市に来たこともない若者たちがそのようなリストを作れるはずがない。だが渡真利は取り調べにさいして暗殺名簿だとは最後まで認めなかった。

こう書くと、検察がいかにも不手際のようにだが、第一次の島送りだけで八十一名、起訴しなかったり裁判で無罪になった者たちをくわえれば膨大な人数の取り調べなので、渡真利一人を追求しきれなかったのも、無理はない。

それに警察の捜査の目的は、直接の犯人の割り出しと

検挙が第一で、つぎが資金やアジトを提供した共犯者たち・渡真利はそのどれでもない。

関係者たちの裁判がおわり処分が決定してから、総指揮をとったアシス警視が総括的な報告書を作成しているが、基本的には「臣連の幹部たちがテロを示唆し、狂信的な若者たちが応じた」として、十名の幹部の名を列記している。渡真利もその一人にすぎない。

幹部たちは取り調べでは、ほぼ一様に、祖国の敗戦をみとめず、認識派への敵意を述べている。しかしテロを指導したことは全員が否定している。総括された報告書でみるかぎり（取り調べの過程ではともかく）、渡真利もそういった十名のなかの一人にすぎない。

報告書の結論として「実行犯たち、直接に金品や宿泊の供与をした共犯者、精神的協力をした共犯者」の三つにわけ、処分が決定した関係者たちの名前をあげているが、渡真利の名は吉川や根来とならんで、最後の「精神的協力をした共犯者」のなかに見いだせる。

ふたたび引用するが、私の新聞連載後に出版された「百年の水流」は、テロの実行犯についても出版の数年前にインタビューをしている。これまでの私の推論を裏付ける証言がおおく含まれているので引用させていただく。

外山さんが会ったのは、押岩嵩雄、日高德一、山下広

美の三人である。

このうち押岩さんは当時三十代でちいさな子があるということで特攻隊には加わらなかったが、当時はキンターナというマリリアの近くに住んでいて、いわゆる同志のひとり。日高さんは当時ツツパンにいて、元アルゼンチン公使古屋重綱宅の襲撃にくわわった。山下さんもツツパンにいて、元文教普及会事務局長野村忠三郎と脇山元大佐襲撃にくわわった。

三人とも、それぞれの社会的地位もあり平穩に暮らしていて、インタビューは思い出話を聞くという形だから、細部の矛盾点などについて突っ込んだ質問などはない。

しかし、三人が自発的に語った話に共通した、そして重大な点は「サンパウロ市にでて認識派のだれかを殺ろうと思ったのは、臣連から命令されたのではなく、自分たちが思い詰めて、数人の同志が集まって相談したことだ」という。

この点は、私がいままで述べてきた、渡真利一派が執拗なマインドコントロールをマリリア地方を中心にしていた、という論旨と矛盾していない。というより私の説を裏付ける証言かと思う。

彼等は「自分がそう思った。人に命令されたのではない」と言っているが、「そう思う」ような誘導があったのだ。

当時の地方の青年たちはほとんどがサンパウロ市へ行ったことがない。サンパウロ在住の識者たちの認識運動の詳しい事情ももちろん知らない。それなのに「サンパウロの要人」を襲撃するという発想は、じつは外部から与えられたものでしかない。

このインタビューにはもう一つ、重要なことが含まれている。その部分を引用する。

『さて、二人は行動に移ろうとしたが、サンパウロへは行ったことがない。そこでポンペイアの横山重男という先輩に相談したところ「そうか、お前たちがそこまで決心したなら」とお膳立てをしてくれた。横山が三人の話を繋いだのが、キンターナの新屋敷砂男である』

『彼ら十人をサンパウロの終着駅で出迎えたのが、先行していた新屋敷である。彼はサンパウロに詳しく、十人の潜伏場所を何箇所か用意してあり、そこへ連れていった』

なにぶんにも思い出なので、べつべつの場所に住んでいた十人が一緒にサンパウロへ行ったのかは、いくらか疑問があるが、十人のうち八人までは農業だったという。潜伏先というのは、渡真利にちかい仲間の小笠原洗濯店や市街のはずれの沢井小農園などだった。つまり彼らは「自分たちの行動は臣連と無関係」と主張しているが、影でお膳立てをしたのが渡真利一派だったことは、このインタビューでもハッキリしている。

新屋敷（しんやしき）は渡真利とたしか同年であり、以前から知り合っていた筈と、かねてから私は推定していた。

押岩談話にも、

『これは、という男たちに声をかけて歩いたのは新屋敷で、すでに四十歳ちかくキンターナでは青年運動のボスであった』

とある。

戦前でも植民地同士の交流はすべての面で活発で、マリア地方の青年運動のボスと、近くのキンターナ地方の青年運動のボスが知り合わないはずはない。それが興道社Ⅱ赤誠会の同志獲得運動時代に共通の目的をもった同志となったのではないか。

つまり渡真利には「鉄砲玉」の一本釣りをする同志が地方に数人いて（志願者のまとめ役をした幾人かの名前は知られている）、その中心的人物が特攻隊隊長の新屋敷だったと私は思っているのだが、記録によると彼が当局に逮捕されたのはかなりあとで、最後の第三次島送りに名前がでている。テロ事件が山をこしていたせいもあり、また持病があったらしく、まもなく亡くなっているのです。私の目にしたかぎり彼に関する記録や談話はほとんどない。それに赤誠会の強力な秘密保持に彼も同調していたはずだから、かりに元気で出所したとしても、肝心なこ

とはなにも喋らなかつただろう。

すでに戦中に渡真利が作成した「興道社挺進斥候隊」の規約に「機いたらば本社の役を辞し」とあるように、鉄砲玉が臣連会員だったら脱会させるが、はじめから会員でないほうが好都合なのだ（脱会して参加した隊員もいる）。

渡真利は四月一日の事件のあと二日に逮捕され、五日の取り調べのとき「犯人たちが会員なら理事として責任をもつが、会員ではない。臣連がコントロールできない、不幸な事件だ」と供述している。

彼は事件の翌日に逮捕された。家族会員をふくめて十二万人と呼号していたのに、どうして犯人たちが会員ではないとすぐ分かるのだろうか。あらかじめ仲間うちで打ち合わせてあった言い訳としか思えないのだが、一方ではアジトを提供した小笠原は「自分が首謀者だ」と認めている。そのあたりの鍵をにぎる新屋敷は逃亡している。マスコミが群がっていて調べはどんどん進めなければならぬ。ゴム棒で叩いても渡真利は落ちない。・・警察がおかれた状況はそんなだった。

特攻隊は四月一日に古屋と野村を襲撃したが、マリリアを中心とした地方にたちまち連鎖反応がおこり、ほぼ九カ月のあいだ、一般のブラジル社会からは「狂気」としかみられない状態に日系社会はおちいった。とくにテロがはじまって四カ月後の八月十五日の終戦一周年前後がピークだった（終戦一周年を境に実力行動は急速に下火になる）。

すでに述べたように、各地に特攻隊志願のグループが誕生していた。新屋敷がサンパウロへ連れていったのは、そのうちの十人だけである。新屋敷や渡真利は第二次、第三次の特攻隊を組織して負け組の要人を根こそぎ標的にするつもりだったかもしれない（そういうことを事件まえに一本釣り師が言っていたらしい資料もある）。

渡真利たちは襲撃者たちが臣連の会員でなければ臣連には類が及ばないと、高を括っていた節がある。あるいは戦中の焼き討ちのように事情聴取くらいで済むと思っただのか。いずれにしろ彼は自分の理屈で動いているだけで、警察やブラジル社会全体の動きにたいする読みはほとんどない（ただし、一般社会の動きを考慮しないのは新屋敷や渡真利だけともいえない。勝ち組にとって連合国側のブラジルは敗戦国なので「敗戦国の人間が何をいうか」という気持ちがあった）。

指導するグループを失った各地の志願者たちは「名乗

りをあげた以上、決行しなければ卑怯者になる」という意識も手伝って、地元で勝手に襲撃をはじめて収拾がつかなくなった。

あれほどの連鎖反応がおこった原因については、すでに述べてきたように赤誠会系の戦中からの根強い煽動が主因だが、のちには渡真利一派だけでなく、各地に煽動者があらわれた。それらの煽動をやすやすと受け入れた側の下地として、もういちど「敵中横断三百里」について述べないと不十分である。

新聞連載中、読者の反応がとくに多かったのはカーキ色の外套についてと「敵中横断三百里」の本に関してだった。比較的若い読者からの反応はカーキ色の外套についてで、高齢者の反応は「敵中横断三百里」に集中していた。

戦後に読書年代に入った私にとって、戦前の本の「敵中横断三百里」を着想し、そこにたどり着くまでは容易なことではなかったが、それを発表すると、続々と反響があった。驚いたことに、戦前に読書年齢に達していた当時の若者のおおくの人達が単行本やこれが連載された少年倶楽部の熱狂的な愛読者だった。

サンパウロ州南部にある海岸地帯のイグアツペから電話をいただいた西館武保さん（78）などは「自分は小

さいときブラジルにきて、日本語学校へはあまり行かなかったが、この本を暗記するまで読んだので、自分の日本語の力はこの本でついた」と言っつて、一部分をスラスラと電話口で暗唱して、私を驚かせた。「敵中横断三百里」とか「爆弾三勇士」など、いまでも文章をほとんど覚えてるそうだ。

戦前から戦後のかなりの時期まで、移民社会では（とくに農村部では）日本語の書籍が少なかった。一冊、あるいは数冊の本をぼろぼろになるまで読んだという経験は多くの人達から聞いた。したがって特定の本や雑誌からの影響は、日本では想像もできないほど深いものがあった。

それらのなかでも、とくに「敵中横断三百里」の影響は強かったらしい。

日本の本や雑誌がどんな風に読まれたかという具体例をひとつ挙げたい。

私もいくらか関係している同人雑誌『日系文学』に山口了市さんが「昭和の一桁人間」という小説を投稿された。昭和の一桁の日本的教育をうけたために戦後のブラジルで不器用に生きる男の姿を描いている。信吉という主人公の少年時代はフィクションではなく山口さんの経験そのものだと推測できるので、一部分を引用させていた

だく。

『信吉は幼年期をパウリスタ延長線のマリリア市ですごしたが、当時は田舎町であつたにもかかわらずコーヒー景気で活況を呈し、サンルイス通りには日本人の商店が両側をずらりと占め、その中心地に信吉の父親は果物店をひらいていたが、丁度そのころは日支事變の真つ最中で、日本愛国婦人会が結成され、街角のいたるところで第一線で奮戦中の兵士に送るための腹巻に、千人針をねがう婦人会の会員の姿が見受けられた』

ブラジル人たちと同居しながらも、日本そのものだった日本人移民たちの姿がわかる。軍国主義が濃い。一方のブラジルもナショナリズムを強める。移民たちにとって祖国の軍国主義とブラジルのナショナリズムが軋みはじめる。

『小高い岡のキリスト教会の十字架のふもとに、日本政府からの贈与で日伯（にっぱく）小学校が建設され（醍醐注・伯はブラジルの意味）、七歳になった信吉は日語初等科の尋常一年生に入学するが、わずか半年後に時の大統領ゼツリオ・バルガスがブラジルにおける外国語教育を禁止する。（醍醐注・十二歳以下に外国語教育の禁止令）

マリリア市に在住する日本人はとくに子弟の日本語教育に力をいれていたので、絶対にやめることはできない

ので、なんとしても続けなければならぬと、日本人会の有志が集まり相談会をひらき、おおきな倉庫あるいは集会場などを借り受けて、生徒をそれぞれ三十人くらいずつ、一人の日本語の先生をつけて日本語教育をおこなうことに話がきまったのである。

信吉が入学した臨時学校は松永ホテルの裏庭にある物置だったが、数日後に扉をコトコトたたく音がするので神山先生があげると汚い身なりのブラジル人がいて「ここはたしかに床屋だったとおもうが、引っ越したのか」と聞くので、先生は「そうだよ、引っ越したよ」と答えると、男は「失礼しました」と退散したが、そのあとが大変だった。日本人会の全員があつまり、その男は刑事にちがいないと長談義のすえ、ただちに臨時学校を閉鎖して、各家庭に生徒を三人ずつ呼んで、約一時間ていどの授業を先生が巡回授業をおこなうことにきめた。しかし二カ月ほどすると神山先生は「生徒の家を一軒ずつ巡回して歩くのは年寄りにはとても体にこたえるので辞めさせてください」と辞表を提出した』

そのあと信吉はべつの先生に二年ほど教わるのだが、当時の日本人移民達が日本的な教育（国粹主義）にかける執念が、これだけの文章でもよくわかる。またマリリア近郊で日本語教師だった渡真利の姿もいくらか連想できる。当局の目を逃れて巡回するようなハードな授業は、

おそらくかなり使命感がないと勤まらない。またそれだけに渡真利の心にも鬱屈したものが溜まっていっただろう。

さて、つぎがいよいよ少年倶楽部の話だが、お茶でも飲みながらこの文章を読んでいる方がおられたら、後で読んでいただきたい。

『彼の父親は息子の勉学の補強のためにマリリア市の日の出書店で少年倶楽部を買い求めて、信吉に読ませるのであった。

当時の昭和十二年から十五年までの期間中に発行された同誌はとてもおもしろく一度読みだしたら途中でやめられない程だった。しかし古びてくると惜しくもトイレトペーパーに使われるが、その時代にはまだ気の利いた便所紙など存在しなかったせいでもある。信吉は用を足しながら、時間のたつのも忘れ果てて何回でも読みふけたものである。

その当時の便所は大地に深さ約十メートルの穴を掘り、その上に板を張りわたし、真ん中に縦四十センチ、横二十五センチの穴を穿ち、その上に跨いで用を足したが、穴の底には無数の蛆虫がウジャウジャと蠢いており、とても気持ちが悪いうえに臭くて鼻持ちならぬ代物であるが、それでも一向気にならず、一連の連載物のあまりの面白さに時間のたつのも忘れ果てて読みふけり、父親に

「はやく出ぬか！」と怒鳴られたものである』

信吉少年が記憶している当時の連載は天平童子、怪人二十面相、風雲黒潮隊、新宝島など。少年倶楽部に連載された「敵中横断」が本になったのは昭和六年だから信吉少年が読みふけていた雑誌には掲載されていないが、当時の少年倶楽部や本がどのような読み方をされていたかの一端は、この文章でもよくわかる。「敵中横断三百里」や「爆弾三勇士」の世界は、もちろん日本の少年や若者たちにも浸透していただろうが、何度も何度も読みさらさら便所のなかでも読む、一字一句まで覚えているというほどの読み方ではブラジルと比較にならない。

したがって、日露戦争の「敵中横断三百里」の世界を具体的な行動目標として第二次大戦中と戦後のブラジルに持ち込んだのは渡真利とそのグループの赤誠会だが、そのバーチャルリアリティの世界を荒唐無稽と思わずに現実の世界として受け入れる素地は当時のコロニア（日系社会）に十分すぎるほどあったことになる。

戦争で苦しんでいる祖国のために「何かしたい」という気持ちは勝ち組、負け組にかかわらず、持っていた。とくに若者にその気持ちは強かった。しかし、何をしていいか分からなかった。

漂っている小舟の舳先を水中からソツと「ある方向」へ押す。たくさんの小舟がその方向へ流れだす・渡真

利一派はそういう作業をして志願者をあつめ、特攻隊を実現した。それでたちまち各地に連鎖反応が起きた。

前述の特攻隊員たちの思い出話にもあるように、各地に「自分たちがやろう」と思い詰めたグループが誕生していた。しかし彼らだけでサンパウロへ行ったとしても、どこで何をしてよいのか見当もつかなかった。それを新屋敷のような男たちが集めてサンパウロへ送り込んだのだが、特攻隊は十人もいれば十分だった。特攻隊が派手にやってから、新屋敷は逃亡、渡真利や小笠原や沢井など関係者はすべて逮捕され、各地のグループのメンバーは（最初の目的の）サンパウロへ行く手だてを失った。それで彼らは手近な、自分たちが住んでいる町の認識派を襲いはじめた。だから犠牲となったのはその町の小さな商店主とか歯科医とか、ほとんどが日中に仕事をしているところを襲われたのである。

（四月一日から九か月後の四七年一月の最後のテロ事件はサンパウロ市でおきたが、実行した地方青年たちは取り調べの通訳をしたので勝ち組に名前がいられていたというだけの人物を標的にし、かつ別人を射殺した。この一事をみても、地方青年は手引きがなければなににもできなかったことが分かる）

東谷さんの「秘密結社興道社の真実」に手掛かりを得

て「敵中横断三百里」にたどり着いてこの文章を書きながら、もう一度、過去の勝ち組テロ関係の出版物に目をおおしてみた。

一つだけ私の論旨にきわめて近いものがあつた。

サンパウロ新聞社発行「戦後15年史」に、テロにくわわつた少年や青年層は当時の「少年クラブ」などの愛読者だつた、という記事があるのだ。そこを引用する。

「特攻隊というのは臣連の組織のなかで挺身隊といつていたものをさしている別称で、日の丸の旗に出身地を書いて、それを腹に巻いて出撃するというものものしきだつたという。彼らの大部分は幼いころ父母とともに来伯してブラジルで育っているが、日本的な教育を施されて軍国調はなやかなりし当時の「少年クラブ」とか「雄弁」「キング」などの影響をつよく受けて、盲目的な愛国主義者、国粹主義者となつていた。だから臣連幹部の命令を至上命令と心得て、つぎつぎと同胞にたいするテロを行つたわけだが、そういういちずな若者を唆して、テロにまで走らせたものの罪は（前途ある若者たちの道をあやまらせ、有為の同胞を殺害した）という二重の意味でひじょうに深いものがあると言えよう」

この文章を読むと、真実のほとんど角口まで、当時のサ紙の記者も到達していた（書いたのは、おそらく当時の内山編集長）。

ただし、かつての私と同じように、角口にはいるのだが、真相への入口がどうしても見つけられなかった。きわどいところまで分かっていたが、全体の構図がわからなかった。これは赤誠会系の秘密保持が強固だった為と思われる。

「コロニア戦後10年史」（パウリスタ新聞社）には戦中に焼き討ちなどがあったことは記されているが興道社や赤誠会の名前は出ていないし「コロニア戦後15年史」には戦中の動きはまったく書いてない。戦後のことだけを調べてもほんとうのことは分からない・・ということ。が当時は分からなかった。

勝ち組の心理はどこでも同じだったのに、テロは渡真利の影響力の傘下にあった地方以外ではおきていない。戦時中からそれぞれの指導者に率いられて興道社に参加した高原地帯のカンポス・ド・ジヨルドン、あるいは海岸地方のジュキア線一帯、近郊のモジ地方なども戦後は臣連の組織の強かった地帯で、負け組との対立は深刻だった。がテロはなかった。「旋風吹きすさぶジュキア線」という謄写版の記録などがある。題名だけでも対立や軋轢がひどかったことが推測できる。またサンパウロ州に隣接するマット・グロッソ州やパラナ州にも強固な勝ち組はおおく、負け組との対立が深刻だったことはすでに

多くの随想や自分史に書かれている。それらの地方でも後述する北パラナの親分こと谷田などの有力者に率いられて臣連支部はできたがテロはなかった。

臣連の勢力が及ばなかった遠隔のリオ州やアマゾンにも移民たちはいて勝ち組は存在したが、負け組とのあいだに社会的緊張が生じるほどの対立は記録されていないし、私が以前に各地を訪ねたおりにも、そういう話は聞かなかった。

私が今日まで読んだり耳にした旧臣連会員たちの日記、手記、談話、あるいは新聞雑誌への投書は、ほとんどすべてが「臣連は精神的な運動であり、テロとは無関係だ」と主張していた。それにたいして旧認識派の立場は「それは勝ち組の言い訳にすぎない。現にあれだけのテロを起こしたではないか」というのが、偽らざる気持ちで、旧会員たちの主張は無視されてきた。

しかし、テロの系譜が明らかになった今、旧臣連会員たちの主張は本音だと思う。会員二万、家族会員を含めて十二万という人たちのほとんどは（かれらが軍国主義的な傾向を強くもっていたことは否定できないにしろ）、臣連の指導者は吉川元中佐であり、「吉川精神」と呼ばれた指導原理にしたがって行動していたつもりだったに違いない。特攻隊を組織して実行させるには旧赤誠会系の、渡真利の思想と行動に深く同調している十人なり二十人

なりの、サンパウロと地方の人間がいれば十分だった。

そして連鎖反応でテロを実行した地方の人間も、もはや臣連の会員かどうかは問題にはならない（実際には会員がおおかったが）。

ただし、煽動者にしろ実行者にしろ、彼らの背後に十万人の味方がいるという心理は無視できない。実行者の多くは「あのときの雰囲気で、やらなければならぬような切迫した気持ちになった」と述懐している。

12 軍事探偵

情報部理事に就任した渡真利は必死になって軍事探偵を探していたが、じっさいにそういう人物はすでに暗躍していた。

戦時中、渡真利たちの煽動によって襲撃され、あるいは脅迫文を受け取ったハツカや養蚕農家を、戦後まもなくふらりと訪ねる一人の男がいた。すらりとして鼻筋のとおった人物である。

彼はマリリア近郊の農村を歩いていた。村のそとは綿畑がどこまでも続いている（戦争が終わり、ハツカや絹の特需景気に陰りがみえはじめ、綿や馬鈴薯がつぎの農村景気を担おうとしていた）。

門構えの立派な農家のまえで立ち止まった。それが高

橋という農家でハツカで当てた一人だということは下調べしてある。家は新築で、門には松などをあしらっている。くらか日本の農家のような雰囲気がある。

「ご主人はいますか」

出てきた妻女にいった。

「はあ？ どなたでしようか」

「いや、お会いして話します」

と男はいう。

応対した高橋は見知らぬ男に対してはじめは見下したような態度をとったが、二十分もすると立場が逆になっていた。卑屈な様子になった。男はこんなことを言っていた。

「そんな訳だから、われわれ特務機関の者が戦時中アメリカに協力した海外邦人のリストを作成して日本の特高へ送ります」

「しかし、私はハツカは作りましたが、べつにアメリカに協力するつもりでは・・・」

高橋は額の汗をふいた。鼻筋のとおった白哲の男はするどい視線にかすかに笑みをまじえて優しい口調になった。

「部下がつくったリストを最終的に調整するのは私です。高橋さんが祖国に協力する熱意があれば、リストにその

ことを書き加えて帳消しにしましょう」

「いったい、どうすればいいのですか」

と高橋は聞く。

「特務機関に資金援助をすれば、あなたは我々の協力者になる。協力者として名をつらねればハツカを作ったのもその資金調達のためという名目になります」

「はあ・・・」

「特務機関というのは海外の各国で活動しているが、とくに敵国のなかでは日本政府が正規に送金はできません。

活動資金を現地調達するのが特務機関のやりかたなんだ」
「なるほど」

「まあ、これは強制はしない。ただ、さほどの額ではないので協力者になったほうが高橋さんに有利だと思って話をしてる」

「いくらでしょうか」

「ときどき、必要におうじて援助を受ける必要があるが、一回に・・・」

と男は金額をいった。一人の労働者の二カ月分の給料くらいである。

「そのくらいなら」

と高橋は愁眉をひらいた。

「よろこんで協力させて頂きます」

高橋は農繁期には何十人も人を雇う。そのくらいの金

額はなんでもない。金庫から金をだして渡した。高橋は昭和十年代の移民である。日本の特高や警察に恐怖心をもっていた。男はそれを巧みに利用している。口調は柔らかくても『特高』などと言っただけでほとんどの日本人は恐怖心をあおられるのである。

男は高橋の知らない戦争の状況など話してきかせた。彼が辞去するとき、高橋はもう一度聞いた。

「あなたのお名前は？」

最初に何度か聞いたが、男は特務機関の者に名前はないと笑って取り合おうとしなかったのだ。

「高橋さんはわれわれ特務機関の協力者になったのだから、あなたには名前をいみましょう。私は南郷大尉です」

「南郷大尉！」

「他言無用ですよ」

と釘をさして男は門をでた。

その男はほかの農家もまわった。大物の高橋が協賛金を最初にだしたので、ほかのハツカや養蚕農家も嫌がるところはなかった。一週間ほどその地方に滞在して懐を金でふくらませて男はサンパウロに戻ってきた。

渡真利が捜し求めている特務機関の南郷大尉とようやく会えたのは終戦の翌年の三月二十日のことだった。紹介したのは北パラナ（パラナ州北部）の親分の異名が

あつた谷田だった。

渡真利は日記に、

「谷田氏と特務の方と会談す。ヤット見つけた待望のお方。特務のお方」

と記している。さらに二日後の二十二日の日記に、

「二人にて特さんと談合する」

とみじかく記している。この頃、渡真利は日記に重要なことはなにも書かなくなっていたが、南郷大尉と会ったことがよほど嬉しかったにちがいない。

戦時中から「特務機関員がブラジルに潜伏している」という話は噂としてあつたが、誰も本人をみた者はいなかった。

特務機関の南郷大尉と自称していたのは川崎三造というサギ師で、まわりでは彼を疑った者もいたようだが、渡真利にとっては「現れたこと」が大事だったろう。彼は渡真利の指示で協賛金を臣連からも毎月受け取るようになった（幹部たちが逮捕されたあとも、臣連から協賛金を受けているし、島送りの渡真利にも面会人に託していかかわしい情報をおくっている）。

川崎は長身で端然としたルックスだけでなく、ある意味で限度をわきまえたサギ師だったから、渡真利の暗殺計画など知ったら諫めたかもしれない。しかし、渡真利が軍事探偵に会ったのは、时期的に遅すぎた。暗殺計画

はずでに練り上げられ、特攻隊員の訓練もすで終わっていたのだった（そのことを実行直前に知ったとき最高幹部の根来は真っ青になったという）。そして特攻隊の襲撃が実現したあと、渡真利たちは逮捕されたが、すでに各地で準備されていた挺進隊予備軍に連鎖反応が起り、模倣的な犯行がほぼ九カ月にわたって各地で繰り返されたのだった。

その計画の実行が、ようやく手に入れた月給千二百クルゼーロの生活を破壊し、妻子に収入の道もなく、苦勞して作り上げた臣連をたちまち瓦解させ、病身の吉川にふたたび獄中の苦しみを与えることになるのは、目にみえていたのに、彼はまったくそのことを考慮しなかったのだろうか？

私にはそのことが不思議にさえ思えるのだが、おそらく彼はすでに「敵中横断三百里」の建川中尉になりきった人生を送っていたのだろう。彼は日本軍人の伍長であり、生きていたのはあくまで戦地であり、現実の世界にはもう戻れなかったのだろう。川崎が戦後十年ほど特務機関の南郷大尉になりきって生活していたように。

戦時中、四人の仲間とともに暗躍していただけの男が、戦後、運命のいたずらで十二万人の団体の事実上のトップになってしまった。しかも、その男は三年前から現実とはちがう世界に生きていた。

山之内元大尉がのちに吐き捨てるように言ったという「あいつ（渡真利）は伍長だけの器量の男さ」という言葉には万感の思いが籠もっていたのかもしれない。

付記 1

一九五四年（昭和二九年）一月にサンパウロ市創立四〇〇年祭がおこなわれ、その前年から日系社会も協力を求められた。

東山農場支配人の山本喜誉司らが中心になって日系社会一丸となった祭典協力委員会ができたが、その際、「戦中、戦後の争いのことは今後は一切言わない」という申し合せができ、このコンセンサスは驚くほど守られ、その後の日系社会発展の基礎となった。

根来は釈放されたあと日本へ帰った。

渡真利の消息については、数年後にアンシエツタ島から釈放されたあと、かつてアジトがあった問屋街の広場でパステス売り（挽き肉を小麦粉の皮でつつんで揚げたもの）をしていたのを見たとき、スエーデン領事館日本人権益部で働いていた森田氏から直接に聞いた。それからマツト・グロツソ州でしばらく仕事をし、パラナ州で勝ち組系の刊行物を手掛けていたらしい。これが戦後十年

目くらいで、それ以後については私はしらない。

最近、ほのかに聞いたことだが、晩年はたくさんのお孫さんにかこまれて平穏な生活だったという。そして「星の人（宇宙人）」と語る会」の理事だった。

付記2

歴史にイフはないというが、もし吉川が入獄せず、脳溢血にもならなければ、脇山元大佐のようにすぐに敗戦を認めたら、山之内元大尉のように認めたら公表しないまでも「勝敗不明」としたのではないかと私は残念に思うことがある。

四月一日のテロのあと、DOPSは当初、臣連と袂を分かった在郷軍人会のほうがもっと危険だと見なし、手入れをした。民間人の団体より軍人の団体のほうが危険だと思われるかもしれない。

ところが、警察が押収した規約のパンフレットは、三の項に「大戦の結果は勝敗いずれとも定めがたいから、明確となるまでは慎重に行動する」と記されていた。日本が勝ったとは言っていない。このとき山之内元大尉たち三十七名が拘束されたのだが、取り調べの結果、起訴されず釈放された。

吉川はけっして物分かりの悪い人間ではなかった。

吉川が元気だったら臣連は勝ち組の団体として活動したにせよ、吉川の指導による精神運動が主で、在郷軍人会のようにさしたる問題はおこさず、徐々に衰微して自然消滅したのではないか。

しかし歴史にイフはないとしたら、終戦二年前に渡真利が訪ねてきて、彼を受け入れたとき、すでに吉川の命運は定まっていたのかもしれない。

なお、吉川と謡の関係について、彼の一番弟子だった鈴木威（建築技師）が書いたもののなかに（「コロニア芸能史」に触れている箇所がある。

それによると、吉川の流派は宝生流である（戦後いちやくでた「コロニア戦後一〇年史」（パウリスタ新聞社刊）には観世流とあるので、いままではそれが流布していた）。

戦前最後の「伯謡会」のプログラム（1941年）を見ると、吉川は「隅田川」のシテ、「羽衣」では太鼓で名が出ている。

脇山元大佐と吉川元中佐は陸士の同期で仲がよかったが、終戦を境に敵と味方の立場になった。脇山もかつては吉川と一緒に謡を嗜んでいた。

脇山が勝ち組テロの凶弾に倒れたあと、奥様が「鈴木さん、これを使ってください」と愛用の小鼓をもってきて

た。

その数年後、吉川が亡くなって、娘さんが「父の形見です」といって愛用の太鼓をもってきたという。戦後の「伯謡会」の公演にはその二つがならんで 舞台上で使われた。

なお、アンシエッタ島から釈放されたあと、吉川は僧形となり、毎日脇山の菩提を吊っていたと、鈴木は記している。

主な参考文献

- 「臣道連盟」 宮尾進 サンパウロ人文研究所
「獄中記」 吉井碧水 草稿
「秘密結社興道社の真実」 東谷朝夫 草稿
「敵中横断三百里」 山中峰太郎 講談社
「狂信」 高木敏朗 朝日新聞社
「百年の水流」 外山脩 トツパンプレス
「コラソン・スージョス」 フェルナンド・モラエス
「オ・シンドウレンメイ」 マリオ・ミランダ